乳津沁

ロ仁 9
1530

蒙津集序

伝へきく善を好むときは。遍く善い
たるも。善を人にとれば。其善廣しとや
一日。某庵を訪ふ。座邊に一篇の草稿
あり。読みてこれをとられば。農家の切要。
古老の説話。若干を記せり。いそかに懐よ
せんとふかく辞してゆるさじ。終に
強ひもとめて得る。同志の人見えて回とし

1530

民家の子弟これを自用ひて渡世の一
助ならん。願くは迷に棒に杖め。世より
広ふ世よく予を素人ふ志るべくひ。粗工に
命だ。故に草稿のまゝ校正を遂ず
恐らくハ謬あらんことをおもふ人これとゆ
るしたゞ其意理を会ふをもれを用ひすへ
きを希ふのみ

明和七年庚寅八月

矩道記

自序

予が文盲ハ予をしる人ハ知れる所なり。
拙きにかつ怖事どもを書すぐ書きは
何とやらん。嗚呼が怖しれども、しるしに
他人に示さんとにハあらず。常々宿をに
きけること手にいれ侍り。服にしるて
日用。予が杖として世の中をつくる。
たすけとなし侍まいで。予に志ハ

同ふす處。子孫をあはれんで便ともなれかしとおもふまゝ。拙を忘れて。筆をとりて述ることしかり

寶暦九年己卯正月

家訓目録

上巻 凡十一ヶ條

○主人心得の話 初丁

○家來心得のはなし 三丁メ

○親の身にとりて心得の話 六丁メ

○子の身にとりて心得のはなし 八丁メ

○夫の身にとりて心得の話 十一丁メ

○妻の身にとりて心得の話 十二丁メ

○女子に養ひ壻を貰ふ心得の話 十四丁メ

○養子息男となる人心得の話　十八丁メ
○嫁養子などにやる親心得の話　廿二丁メ
○使ふ人を傷まぬ心得のはなし　廿六丁メ
○金銀貯ふる心得のはなし　廿九丁メ

家津楽　上

○老人曰。一家の主人たる人ハ心得あるべき事なり。惣じて家内の人善になるも。悪になるも。亭主の好むやうに成物也。されバ風俗の出る源なれバ。亭主ハ恐れても恐るべく。慎しみても慎むべきハ。亭主の身なり。又家が身の事が。家が心すてさへ人。拗ふやうにハ曲りねじれ也。されバめしつかふ者が。思ふやうに成べき事。其ハ。大きなる碑となりて入る者ハ。

すべて身もこゝろもおよばぬ事多き物なり。
世人主人たる人。其かゝりに力をため。無益の
事をなさんより。米一粒。糸一筋。紙一枚なくさ
ずとおしむべし。拾ひあつめ。兄弟親類なん
にも及ぼし。知音の人。又ハ。世間の難儀者ハ。
困窮すとも。力に及ばぬ事ハちからなし。
身分相応に救ひてかゝることハ信をつくし
すくひ助くべし。めしつかふ人などハ。心に入れ
ざらぬ不心得いでくるものなり。それと

能けさまへ正し。施すにも。始末にも。名代して
身をたもちゆく天道冥加のえとあらば主人の
事をいふなるべし。主人ハよき人を憐れみ。
愛する心のすなほ也。変ずる至極ハ。悪人にせねば
肝要なし。されバ主人ハ。面白き事ハ見ぬが
よし。その人のうやまはるゝハせぬる事也。
酒宴遊興やむるとはざるにあんばいかりぬが
よし。又一句に見ず。きかず。行ずといふ事は
あれど。月を見花を詠め。おいてもし。腰に

はけて。吹出の酒。あるじハ。破籠やうの袖よ。
かぎる心れたのしミハあらずして。人羨やミて。
業ぶとももも害あるまじくれど。家業に
欠けずハ。あるすべし。身安逸におごりまく
なるハ。人目をくるしうとしやむ。衣服美しきを
着すまゝバ。人見をくるしうとしやむ。美食を
すれど。人見てくるしうとしやむ。かくれどとき
の数ハ。見てく羨やめバ。人の心をなやますし
人を愛して。憐む心あれハ。羨くりやうれ

事なれバきことにあらず。誠に。たゞりを
いましめ。身をたゞしむハ。憂心と患ふの
本なるもれたるや
○老人曰。我ハ古人ハあらざれバ主人
なし。主持ぬバ身の心やすさなど思へるハ。
大きなる謬りなり。人として。君臣のなきハ
なきハなし。君臣ハ。出郷の事。臣とれ。
家来のあるなり。只主婦。さししもしむのもれ
みなもも。あ人に。厳君あるし。まくらハ。父をと

臣なし。女房。子供ハ。家来なり。其上。
家一軒すていへども。先祖ハ。聞えある。高聞武者也。
子孫ハ。功臣なり。家来なり。孝行の子ハ。
私の財宝なしとうけたまはる。それハ何故
なれバ。主君の預り物なれバなり。然れバ。私
身の為に。勝手をいたし。あるひハ。私
財宝をつかふハ。主人の目をぬくといふ盗也。
恥じて。先祖。死してなくなりたりとも。
謝りまうし。おこたる事多し。我が先祖。諸親。

死すといへども。冥鬼ハ。歴々として。常に
眼前におはしますことを。知るべし。生る人ハ。
ふと見ざる所にハ。志ざしいつはりも。志ら
ざるべきが。冥鬼ハ。欺くとおもふとも欺く
ことあたはず。少しも。私事あるまじ。
恐るべし。冥鬼にそむくなり。甚不忠不孝の
至なるべし。人の子孫としてハ。面々。一代く。
其家くれ。断絶なきを。先祖。親達より。仰付られ
たりしおりとひ。臣子の職分を尽すべし。

臣の職とは。孝行を情まいれし私なく。忠義
専一に。怠しむる事でなし。是を子孫の
為みつくば則孝の道と名付るなり。忍耐人れ
諸人へ孝行に出る人は。忠の心にして能く
心を押へて。孝行といふ事無かるべき也。
先孝行といふ。文字は。主人に身をとらる
まる怠といふ儀也。此おもふすは。いかにとも。
又をして。思ふべし。親の子みて。やしなふ
るかなれど。外へは出さぬ也。されば。親養べき

ゆへ。人を親を。養ふてこそ。ひ。手足をのべし。
人らしくなきんがためには。主人をもちて奉公
孝に勤る事なし。此臣が能く心を入べき所也。
すべし。生る物は。何ぞ生てゐるとて。工夫なし。
心を押へて見よ。喰物をはなるゝと。ちからさへ
死るといふ事を知るべし。然れば。主人の物を
くへば。命は主人の命なり。命なれば。身も
あながちなれば。身命とも。主の物に成や。
是がため孫に家用まで。早く悦ぶよ。まことに

事し主の物をくつじ主の身ならば。たとへば。
身に手足あるがごとし。奉公人は手足のごとし。
故に。おのれが手足が身のために不忠なる物
あらんや。わづらひたる。数がふえといへども。かゝらく
と痛みねぢられ。ちやんと手が掻ひよ也く。是
手が頭をまもらふて。頭の忠功をすべしと思ふ
みなあんべく。自然みなかくれなし。主人み
為は命かゝり。あるひはかくれたをとうたを。
せぎ痛むる事を思ふは。不忠の者也けき

ゆへなり。忠を尽すは。志ありて不埒
なるは。人にあらず。人として人にあらざるは。
禽獣ぞ。たとへをや。報ずべき人の恩をしれ
などれるは及ばずとも。せめて実義を守る
とし。心をこめ。身をも捨てても。主人を大切にす
役し。家業を精に入れ。実体の人物なら也。
いろいろ等の事は。誰も。勤べき事也とかく。
人は。恥を知べきなり。貪欲といはれしても。
余所の事のやうにおもふは。余られ。あさましき

ことなり。昔今とも多く忠義なる人は。我党の者に。忠孝を教ゆれは必ず一ツの心と成て。誠忠臣なる家来を持なり。不忠なる人は。其主人しらずして。是も又それ家来が。不忠をするなれば。主人を散々にされ事おしなれるたやし。多くある人に見及び。聞およぶ所也。ひがきの家。男の親のおとし。恐るべし

老人曰。親の身として。子を愛せざれは。なけれ共愛するに。了簡違ひある事多し。されはとて。きびしくすれは。程よかるへし。いかにといふに。子の心は。愛してかくきびしくするのふと。拗ふ子は。すくなき拗し。けつくこゝろひがごとく。恩愛やぶれ。親子のあいだ。うとく成。不孝者となる。類多くあることゝ也。はなはだ。かあひがりて。愛するはそむかれる事や。然まきごとも。幼少の時より。少しも。いつわりそへつ事。此一度はかくいくさせまじき事なり。

幼稚の時は。何事も。おとなしき心なり。
いつはりを。知恵とし。取なし。かりそめやうに
なられ。大きに。あしき事也。小児の時より。
唯うそはいはれぬ。かくしあしきることは。たゞちに
習はすべし。八歳ぐらいより。以下。老少より。是
まきまき人あるやうに。教ふべし。年長ずるに
したがひ。其。先師ぞ其れ。善人を。ゑらび。友とし。
文字いさせ。十五六歳より。縫ものゝ家業を。
心とし。学ぶ精を入さすべし。遊芸は。あるべからず。

まじきなり。是もかくしてこそ慰なれども。あまり
いたづらに。押ふ心をあしけれ。謡。碁。将棋。家芸なども
ふかくすれば。結句。なぐさみも興もあらぬなり。
強く好まば。上手になるれば。其職にあらずして
我職をば。かく事ができぬ。おのれも持上られて。
却て。慰みも成がたし。唯名をば悦ぶやうに
なりゆく事もあるなれ。町人たしなみて益なき
ざる。芸は。茶の湯。立花。続けやし。謡ども。
素人の謡ふは。枝にあまねくたのしむ抱ぞ

かし。拍子が能く合く。かんじんのだかかんじんに。
勘定のあはぬハ。其ためし多く見えける。
とらく。親の風が。子孫へうつるなればかゝ
にも偽なきやうにとしるし。親の身をたゞしくして。
孫よ。万。ぬすむ種。あしき事。なけれまだ。
おしも。抽ずさらしきるすハ。添くせはしき
事なり。かくれおとくして。餘り。子供のあしく
成しるハ。見及ぬよし承る

○老人曰。誰しも。親にたふるゝ事。粗末よ

せんとおもふ者ハ。たとけまども。心にちがひ
ふく。不孝よなる親ある事し。あまり。悪名
おつさゆく。恩になれ。おまくが。で。それが。流
きそく。心あぶそてに成ぞそてハ。やくたいもなさ。
不孝にいる。ためし抽かきなりがくれごとくに
ろいを。評定に。たゞぬるすし。又孝行ま。志し
あそく。只親をおそらにさせ美食をおさく。
居所を。結構まごらくて。部屋さへすきまで。
能きと抽ふ人ある。是ハ。ふに及ねこくし。

たとひ。身ハ。何程。安楽に栄耀くらしても。こゝろ
安楽ならざれバ。其せんなし。されバ身の栄耀ハ
かけたらぬ所あるとも。心安からんことこそ。
願ふハ。人の情なり。これハいかに貧しくバ。子より
も。おろかがおとされし人なり。いかんや子を。
心も。やすからんハ。而して孫のなさゞらんや。
此心を。楽しくする事が。肝要の大事なるぞ。
とかく。親の心ハ。少しもあんじきづかひハ。
なきやうにする事なり。其あんずる事ハ

なほそらくいつまでも我が子を。愛するこゝろより。
子ごゝろもれ。無理非道ハせぬから人ははたらくハ
ふいら。夫婦る。悪事ハなきさう。渡世に油断ハ
なきさら。物ごく不実なる事ハなきさう。恩
親友ハなきさう。悪所へハゆかぬう。不養生ハ
せぬらしく。却ふてくあんじぬ。親ハ人もなし。
是を。悪くあんじさせぬやうに身をたもく
きもそを。守一れ孝と次。是を続つしむ
者ハ。身の栄耀ハ。おのづから。おこるところなく。

心ぞく拙なり。心ある親なりとも。鬼の
やしなひを。分限に過ぐ。結構なるを悦ぶ。
そのふあるを。是とくとも。其程にかなはず。
快悦なるやうにしく。心を尽すべき事なり。
唯く。親を真実に。いとおしく。大切よ思ひ
入るは。なし得る。少しは孝のたよりかなれさらん
昔より。山の奥。辺鄙にも。孝行なる人の。
事跡と手跡したるを見るに。何ぞ。それ
志ありと。いふはれあるまじく。真実に。親を

愛し奉るの外。他事なく見て侍る。唯翁らは
誠の志にこそ。而して。いかんや。いと肉のおちしは。
道明らかなる。書をも。熟覧し。正しき人に交る。
益あるべき事を。頼みにおいてをや
○老人曰。世間夫婦の間。別ありといふ事。まゝ
了簡違ひ有る事。多し。也男女の差別。相を
わけたれ当には。あるらずに相まじらぬ類ひふ
及ぬ差別の。道理正しけるなれども。今日下
くゆくはさやうには勤むるならざれば。

別なる子細を考へ見るに。夫婦の根本ハ。和合の
第一なり。しかれども是に溺れて狎るゝ時ハ。和を乱る。
和を破る。是が為めの故に別と云ふ。不行義
有まじきとの事なり。いふ心ハ。ふかくなさけ不便を
加へ愛し。女ハ。夫を離れて家なけれバ。いふこと
慣るゝなくてハ立ぬものなり。其上さ切なる親を
頼けるものなれバ。使勤まるやうに教しぞかれ
べし。女ハ。なべて疑ひふかきものなれバ。先夫の心を
正しくして疑ハせざる時ハ。女の心ろ。おのづから

まことによするものなり。此のごとくなれバ。夫婦の間。和合の功。
是則ち。別ある所なり。色にみだるゝハ。いやしきなれバ
事なり。女ハ。智恵くらきものなり。子とあやまちなき
ざるやうに。行儀を教ゆべし。肝要とも。智恵くらき
ゆへ。奢りを好むものなり。是をいましむべし。
教へつゝ。ことごとく夫の命も違ハぬやうにす。正しく
守る時ハ。是より教へ及びて。家ともにおさまるなり。
夫の命あしくて。なにより悪しかる女を。不義に落し
入事類あり。慎むべき事なり。親の命より

かゝりて見ゆ。漸々人の子にわらはるゝ。かくれごとさへ。あさましといふ斗なし。恐れつゝしむべきハ。夫の身よわりとなれん

○老人曰婦ハ。我親のいひつけをうけて嫁したる日より。夫の家を家とするなれバ。夫に身をまかせて。おしへられるゝが。婦の道なり。されバ夫の親ハ。直に我親なり。朝夕に能仕へし。孝行に心いれし。夫ハ我を勤むるものなれハ。分絶に違かぬ所多し。夫の身にかゝりて。ひとへに事ふべし。舅姑に

よく孝ありて。夫婦の間。宜しければ。我親までを悦び。安堵さするなり。我親へも。孝行をつくするぞ。女ハ。内を治めて。表向の事に。さし出ざるがよし。身をつゝしミ。男女の交り。礼義正しきが。第一なり。自然不仕合にて。悪敷夫すぐるに。嫁しては。不義をなくして。不義の。悪名をかうむる類。まゝ有なる。志しも正し。女の身に誤りなきにあらで。疑敷事ある故に。悪名ハかうむるものなれバ。女ハおして。身を明白にするかし。つゝしミ慎むべし

人毎に心に和なる時ハ。おのづから。難を除くべき
方便なり。恐れ慎むべし。惣じて。女の性ハ。心
せまく。かしこき事を好み。ふくみ。すこし。かり
かなへど。さかしきことをなき人ハ。おとなしくあらず。
その心から。親類や。眷属。知音の者。中あしく
なすも。女の言葉よりする事多し。是等ハ大
悪事なり。能く。慎むべき事なり。唯女ハ順に
して。夫の心に順ひ。いひ付を守。指図をうけて
万事を行ふべし。我とおもひ。気侭にせず。柔和

にして。万端よく。人におだやかに深くハ。内おのづから。
治まるべしと。なり
○老人曰。世間を見るに。惣じて一人娘に。入聟を
取て。家を相続させる事。甚むつかしき事なり。
是等ハ兼て親の心得あるべき事なり。先名跡
をつがせんとおもふ。娘子の婿ハ。幼少の時より。仕入が
肝要なり。其仕入やうといふハ。六ツ七ツの時より
気随。気侭をさせず。常に。いひ聞かせ置ハ
其方ハ。女といへども。此名跡を。継がねばならぬ

外なり。去るゆゑに。女ハ假令。妾となりても。表を
勤むるなれバ。故に。男子を貴び。入婿とし。
其人を以て。名跡とするが。則ち其方を。名跡と
ぞろへいふものなり。女ハ。何事も。夫に。ちかびて
夫をうやまひ。身を慎しみ。おのれが我慢を用ひ
ぬが。女の道なり。女ハ内を治め。夫ハ外を治むる
ものなり。平素をいへバ。夫婦ハ。則ち二身にて一躰
なり。男ハ面より下前通りのごとし。女ハ。もとより
下脊どよりのおとし。されバ男一人にても。女一人

にても。独身なるハ。一身全からぬがごとし。去れバ。
夫婦おっと不和合するハ。中風病と同じものにて。
恒に身をはなれぬものなり。此和合せざるハ。
いかなれバ。脊とする女が。表なる目口の指図に乖き。
不順なる仕へありしあるべし。されバ。此理を能く
了れかし。女ハ棄私めして貞しく夫を神とも。
佛とも。一筋に想ひて。身を打任すべし。かくの
ごとくして。能全なれバ。則父母への。孝行も
其中に。籠るなれど。くまなく常に[illegible]べし。

扨養子息子を。貰ひて。是を惣扱ひにせば。まづ
父母の心入。甚大事なり。兼て婿に。いひ聞せし
所なし。父母の息子あしらひと。少も相違有ては。
必。不和合に成るものなり。此所せらるゝは。心得
なくて。不相續の基とする事あり。それを
いふといへば。息子を貰ふ娘に。先存分に。手代
ぶんのしまて。誓約し。或ハ二三年も。見世まで
手代並にして。つかひ。其上其人柄と。心ざしを見届。
是ハさもあるべき事なり。去れしごと。去てに大きに。

心得のあるべき所なり。縦令手代並にして。試ることも
其扱ひを。手代同前にするハ。家督の譲りあり。息子に
する者ハ。娘より。其扱ひハ。息子のごとくすべき事
なり。先父母よりして。息子を。重んじ。娘よりも
厚く愛し。娘にハ兼て。いひ聞せ置しごとく。
別して大切に。つかへさすべし。父母より息子をおし
らひ重んじなれば。いかなる娘なりとも。大かたハ。夫へ和順に
なるものなり。それをさやうハ。あしくして。息子ハ
手代小者と。一所に寝させ。夜具にも心を付ず。

悪虫。物を喰ふすと。手代衆ハ。下座ふ座き婿ハ
寝臥も。座敷圍爐の邊ふ。腹ゟめして。体ませ。
物喰ひと。父母の側上座ふ居り。詞も。おのれと
奢あぐり。息子ハ。入人ありしバ。何事も。意を恵ん首そ
孝ふ座めり。一くハ。支櫛ふ至バ。略しぬ。大やう。
是より事すらり。女ハ心。淺きる事どもの也。我こそ
此家の主とおもひ。なんあく。竈将軍とありそ。三面
乃荒神と。後づめふし。掖幕を提げ。大言壮を
あぐるやうになり。又息子ハ。女と遠ひ。身かゝるさ

もの事ふしバ。あしらひをよくしそさく。血氣ふなやり。
心うらやそ我身の多し。それを逆ふあしらふ
ゆへ。少心遠慮さ息子も僻みそ。ねぢくむひ。
我慢三合さへなくて。かやうの。むやくしきめを
見る事ふおと。自棄を起し。暇をさるゝさとあれバ
笑ひ顔して。是非眼を遣ふゝ。いづれよ。家の亂を
おこすとあり。是偏よ。親の不行届よして。悪智の
あさり。わが娘を悉くしき。山神とも手と書く
やうな悪魔よあるし。情しき息子と。貧乏神よ

衒化させる事ぞ。倩おもひ見るべし。其訳は。
娘を。可愛く。おもへど。息子の心は僻なく。言令を
する故に。取扱ふべき事なり。娘の身を守りせ
粉なくば。息子なり。息子悪敷なれば。娘も流浪
し。いかなる難儀なる身にならんも。はかりがたし。
能く。工夫あるべき事なり。かくいへばとて世の常
養子息子なる人。これをおもく守すなり。身を
高ぶり。我慢の気性を。挿まば。大間違に。いふ
屈し。是ハ。養父母なる人への。孝心をこそ

のこすべし。いふべし
○老人曰。世に人の養子とする身は。是まで
大切の事なり。我子なき故。他人の子を貰ひて
子とする事なれば。親子の名。甚だ義理厚し。
されば養子を。義子ともいふぞかし。何として
義子といふぞなれば。天地の名に。真実の父母と
いふものは。唯其人なり。然れバ。我を産し父母
俗縁の上。他人へ子となる人なきバ。其あるべし時。
死したるが如し。他人の方へ。初めて行し時。まつ

その家へ。うつり参りしごとく。其乃父母の手にあまへ、
死し。今の父母の方へ。生まれ出られしが。今の父母乃
かつて親といふ者なしとする。是を子の義とする
成なり。然れバ此義を能守る子と。いふ事なりと
心得。倦さ事なり。若しまひ。其れ父母の家。貧しく
ともし。又ハ心ざまあしく。いやられ無理をいひ。
無理をせらるゝとも。おと順ひ。不足を。思ふ
べからず。是則。我生れ定る。天命なりと思ひ。
聊も。たがひ背くべからず。寔に孝出しする。父母

よりとも。其恩義。わすれずして重し。されども。いかほどと
いふに。世に子なども。多き中に。我を撰み出し。
行末をとも。養はんと。我をよと思ひ。子とするを
おもへバ。其義重く。恩も又まさりて深きなるべしや。
其親に思ひ。撰み出し。養はれし身として
若。離縁を不孝すれば。天罰争でか遁れまじ。恐る
べき事なり。其親に背かぬといふに。心得ちがひ
あるものなり。腹の中に。我ハ親の仰にハ。少も背かね
などといふ。理屈あれバ。それが即直に背く根ぞと。

あるべき事なり。されどいふめくいふに。若其根
あればこそ。万事に背かぬぞよし。親も面前でこそ
不調法し。我ハ商ひハよくする。銭ハ溜らねど損く
いふ底意。わるからぬ志なれど。根ある色へ。色よ
あらはれ。親の心にハ。息子が。きげんがあしきとし。
氣をいためて居る。され共氣をはらし孫ばかまひも
せぬなり。さやうなる息子を。親に背かぬ人と
いふべきや。商売を能し。銭金を溜ぬるの
孝悌なるといふハ。志ある事にて。手足ありて。

物陰に禍の者ハ。為ならぬの事なり。実に背かぬと
いふハ。唯親達のわるびんでも宜く。快からぬやうを
のこしおもひて。常にきげんを窺ひ。淋しと
見る時ハ。機に合ふ様なる物でもてなし。下敷
事が好なれば。不礼なる事こそ慎みて。為なる
ことなれど。昔から嫌ぬる事ハ。嫌ひも仕すやう
なる事をとも志てこそ。いふべからずして。偏に心を
安らしめる事を。我ふをいふなり。其縁し志実
乃息子でさへ。壮年ばおのづし。親も志て息が

あまたのごとくおもひ。我(われ)何(なに)とぞ勉(つと)むるとも。凡夫(ぼんぶ)乃
事(こと)なれバ。届(とゞ)かぬ事(こと)多(おほ)かるべし。責(せめ)て我(われ)より
微塵(みぢん)も。満足(まんぞく)のならぬやうに。志(こゝろざし)を
尽(つく)さるべし。さあれバ。親(おや)の心(こゝろ)も。いとゞ安(やす)く。満足(まんぞく)
なくなりて。おしき事(こと)なくても。小児(せうに)を守(しか)るが
やうに。叱(しか)りても。さらやうにあるものなれば。其時(そのとき)
なりとおもふべきハ。是(これ)偏(ひとへ)に。心易(こゝろやす)からぬものゆゑ。さあれ
あるまじきなれど。おのづからなりひ。弥増(いやまし)に
身(み)をつゝしみ。親(おや)の清(とん)心(こゝろ)に順(ちくが)ひ。絶念(たえ)なく。孝(かう)勤(つとめ)よ

事(つか)へて。少(すこ)しも。細目(さゝめ)とも。たがふべからず。かやうに心ろ
人(ひと)を。真(まこと)の義子(ぎし)とハいふなり。義子(ぎし)前(ゆ)遠(ゑん)違(ちが)ひなくて。
養父(やうふ)の身上(しんしやう)。無情(ぶむやう)なを。目(め)あてにして。金銀(この)が
欲(ほ)しされ。養子(やうし)となりなば。心(こゝろ)のうちに。親(おや)へ
乃事(つか)へハ。今(いま)しく姿。恩(あけ)誉(ゑ)。なやふ養父(やうふ)が死(まひ)るひ
でしのことなりふべし。さやうの人(ひと)ハ。其家(そのいゑ)へ養子(やうし)に
よ。来(さうく)らりとも。いかとのよハおもしくば。此(おし)とりとハ
いふべし。此和(このわく)とりハ。いやなものなり。世上(せじやう)の
養子(やうし)達(たち)。心(くるゝぞく)しく。此(この)心もとより仲(なつま)よくへ。いねやうに。

しるべしといへり。むかしの。教戒なり。傍なる
人此ことを守るべし。熟とおもふべし。女子も。嫁となる
身は。舅姑への事は。かやうに心得て。能く此所を
弁へ侍るならば。嫁の道なりとも。全く違ふことなかるべし。
一座の席をも。さこそあるべきなれど。いひて同心しね
○老人曰。息子を。他家へ養子に遣し。或は
女子を外へ嫁らせては。甚大切の事なり。其子
心得違ひありて。淫らあれば。他の家を傷ふ
なりてさしば。其父母たる人。能く心得あるべし。

男女とも。子を他人へ遣すは。此方へ他人よりの
子を貰ひたる時。それの實父母。いかやうにいひ
付ても越し。常くよも。先の。あしらひいかやう
なりて。さるこの。此方の勝手に勿しきぞと。
思ひてゆるべし。其實父母。おしはしてと。
聖方の父母を始め。其身一家のまでも心残
思ひる事あれば。悪見苦しく宜しかねその道。
是その子の心。我ま合ぬ故なり。此恨いづまれ
所なくも。其親とも知りてすふ。つひにきかせざるふ八

おもねど。深く心を尽くし。いとほしみ人を實に
稀なるなり。継母ハ。養子或ハ。嫁に
来れる子にハ。此所を。心底こそ。隔心するやうに
思はせて。はかりしれぬなり。故に思ひ
まらせ養ハ。男女ともに。養子に行。嫁に行ハ。
其行先の時より。家の子此方の子にてハなし。
去ながら。此後ハ。其方が。頼むかくことでハ。養父母
なり。舅姑なり。その人が真実の親達と。思ふ
ものなり。我は其方を手前にて。養育する事

なりぬゆく。他人は深し。養育して徳をかさぬなり。
子を養育する人を。實の父母といふなり。
されバ。今其方。我子としてハ。死したるごとし。
向の家へハ。生れたるがごとし。他人は。自今親を
親と思はず。大きに。あやまりなり。我も又行の
ごとし。況や兄弟一家とても。我方の事をバ
其方が身のことにおもはずして。あるべし。我先祖ハ。
心正しき人にて。人の方へ来るは。唯其家
養父母を。真実の父母と。思ふべし。女なれバ

舅姑ども。真実の父母とおもひ。孝行つくせよ。我を
はじめ。我々これ精進ハ。なるべからず。其家の
先祖代々霊の精進をさへ。大切にし。守りなば。
我々これ精をハ。冥因に。窮りなきもの。御遺言其方
なり。親達とも。さらに家をも。能守り。我が心も其方
子どもと多からん。末々人ハ皆つくるべし。その時々。
先祖の仰を。能く子どもに。いひ聞せ。伝へ
ハせよし。此事を。守りていひきかせ。基なりしなり。
いうも同じ事。天道ハ。慈悲あることのよりて

父母。舅姑に。孝を尽し。又ふとくハ。里へかへる。
里方の親まで。孝をも尽さずバなりかぬといふの。
天沢なくば。勤らぬ事なりて。離縁なるべし。
あるなに。郷の。賢父母。舅姑よりさへ。能孝行
をほくせば。里方の。親の心に合ひ。一家の
其方孝行が調ひては。おおく有がたき事なり
と。おもひて。何ごとも。賢父母。舅姑の。御心に
合ふ様に。致したしものを。敬ひて。必ず他念
なく。起ぞへうしたが。又盃正月の礼など。勤るとも

存生の親達ハいふに及ばず。氏神や。墓所等へ。
参るにも。先其家の。氏神。又ハ墓所へ先に参り
その後手透の時。里かたの氏神。又ハ。墓所等へ
参るべし。かやうの事にハ。志の白らずあらで。
逆なる人あれども。かやうの事ハ。かくてせぬもの
なり。若き達りて。勝手の時ハ。里にしれぶんハ
まいらひでも。くるしからず。前にいふごとく参らば。
それハ先祖の教しなる所なり。いふに及ばぬ事
なれども。万事。むこの親達。舅姑の指圖に。

あてがひを自分の了簡を出すべからずといひ
かせ。是等の事ども。親達と相談させて。出すべし。
扨里かたの。親々ハいくへ人の子ハ。男女ともを
子どもの。要数おしくて。昔ひより。嫁。
呼ひ。さかくたちのあり。子どもゝ。小。要数よく
させる。家内ハ。前のごとく。能いひきかせ
ふにひきさせる通りに。違ハぬやうに。里方の
親々の身の慎しミ大事なり。言葉一ツもいひ
きかせる所とも。間違ぬやうに。用心し。

先第一置ては。やり方あしくバ。心に。すなほを
強く。こゝろを持べからず。又むかふを。咎むるこゝろを
持べからず。親しくなして。養父母舅姑を
悪しく扱ひて。心持をも。子の父母に柔かく心に
なりて。互に身も。心を付。よく家の勤める中
を。孝とし。我が身の家なれバ。死ても崩ても。
二六時中。不断の世話。家が思ふ名なれど。それ
主人の苦労ひて。我かかり。不断の世話をして
其ハ。わかさ。其苦労を。かうむりては。いかれど

勤べし。不断の事にハ。わけてもおもひ。一筋に
むかふの親を大切にし。少も不足を。おもはゞ。
我が老小舅子や。嫁に行る様よ。おもひて。
やはらかなるハ。むかふの者とハ。男小者中には。
むかふのものなり。やはらかにしまひても用小者小
さするハ。上なるからハ。遁れぬ慈悲を。我が一生
の役とおもひ。影のごとく。置ても。親くるう。
厚く勤めて。見させず。いかなる子もそも。其の
慈悲ある。心をさまして。大さにこゝろの様嫁を。

損ふて。中違ひたる才の事ハ。出来ぬもの也。
是いづくにもあれ。他人へ子を遣はす時ハ。
秘術なりとも。かくさるべし
○老人曰。人をつかふにハ。忠実に思ひて
使ふべし。使はるゝ人。己に背く事あらバ。
只真實ならざる也と。知るべし。是則我が
信ずる本の。あらはれたるなり。忠実に思ひ
て。使ふにハ。あしくなる人ハ。悪ならぬもの也。
その真実の手本にハ。我子にも思ひくらぶべし

遣はす者も。皆人の子なり。其親く。何とぞ
能そだて貰ひたく。おもふハ。我子みなよくなさん
事なり。孫かて同じことなり。大法をきびしくし
小法を。ゆるくし。業ゥ習づたのよし。是人を
傷なハざる術なり。大法きびしき時ハ。人恐る。
小法ゆるき時ハ。科をうくるもの鮮し。子備
づよき時ハ。人親しむ。其家内にて。主従隨分
心易く。詞深くして吐合ひ。隔なく。もみまゝしけるが
よし。折めあるハあしし。然らん易き時ハ。

下ざまを侮るべし。いかなる人も祢きまでもこそ。それハ大きなる
違ひなり。其身を正しくして。心ん実なり。
柔和なる人ハ。何ほど心易くても。聊人の
侮りをうけぬものなれバ。大家ハ志しぞ。小家までも。
家内上下ともに。朝より夜る事なれバ。常に
住居窮屈にてハ。互に悪む事も多きものなれバ。
仕るとも。させる事もなきに怒り。或ハ分まで。
和が気のばし心をこしらへ置き。内にてハ。
常住すこしれ。能つゝしみて。人をいやがら

せぬハ。大きなる不慈ならずや。惣じて。
手代より小者に至るまで。善なるも。悪なるも。
多くハ主のもとの次第なり。なすところの
主人が無理をして見せらるれバ。手代小者も欲つきて。
なるぞ。主人欲ふかけれバ。手代小者。主の物を
ぬすまんとし。主人奢れバ。家内も奢る。善悪ハ
主すべく斯のごとし。其裏を知りて知るべし。
されバ人の悪事を。見出し。聞出し。たゞしぬぐ
よし。下の悪事あるなしハ。只主の身のつゝしみ

あらく知るべし。人のおしゆるすハ。気をうけぬ程
よくまもりのあり。いかにいはゞ。善悪ともを
なせば。身の外へ出であらはれ。よく見てしる
ものなりことし。世の人悪を発するを。見出したがる
ものなり。それを悪人なり。此方ハ心を用ひされども少し
事も人善てつぎのなくとも。のぞこのしきりなげのも
悪をうけても。報りふ悪むべからん。善をうけてをも
めらこに。のおもべからん。餘ニ我が目を明らかにのりま
して。我の見る眉すれ時。善悪とも不定なるべし。

善ハおしきとも。挙。悪ハ大きなりとも。なるともむ
施し。悪を身にハ。心くそれよりすゝむ事あらむ。
教ゆるとて。おもるべきハ。心を尽し。立あるべき
事なり。善悪とも。我が心を好む。此くにハ。
心しむるのなり。其所を窺ひて。善悪と
いふすハ。未りそのし。おもろしれるすなり己を
浅ましくて忽いのれ心おこるな。これを直ま。
後言の媒しなり。己を誉るを好みて悦ぶ
ものなり。是ハ又侫人の付込む方便ならと。

古き云葉にもあるよし。此諺と云ことを。
知くハ。女の常にて。我が氣に合ぬ人より。
まするものゝ方へ。いやまさるなり。所を
保け。此淵へ。はまりぬやうにと。慎むべし。
◯老人曰。金銀ハ。人の愛する所なり。是付の
徳ありて。重寶とするぞといへる。心を入ぞ
是なるべし。金玉ハ。至て重き寶なれども。凶年
ありて。飢に及ぶ時。食のかはりに。與へても
飢を助くる代りとなるや。我が生ハ。食を是ひ

奉りて。食國とも申よし承る。其人命に。命の
少人。重く若ろしといへども。人の命を續なり。
金銀を此食ふ次ぐ。人の難儀困窮を救ふが
為への寶なり。されど重きも寶なれば。身を求め
無益の奢りに。用ゆる事ハ。壹厘半錢も
ふく帰りて。費さ用じ紀事なり。世事を
助くるには。金銀なくては。難儀多し。家の
身も貧窮よ。せまりてハ。心ならぬ不義を
出来るもののなれバ。故急の。貯へなくてハ

なるまじ。然りとも。人のため。世のため。国のためなるを
よりて。宝とするなり。金銀を。却て人といふとも。
世の害とも顧ず。只己が為にのみ。ふけ。あまめん
とするは。大きなる僻ことにて。論ずるまでもなく
たらぬ事なり。されどとて。金銀を蓄へざるも
亦不心得なる事なり。身の老后に。せざれば
相應の蓄へは。なくべき事なり。根蓄へをなして
物の用ぞし。いへど。一命をしく商売にも。付ても。
不慮の損銀。或は。火難。盗難など。いろくの

不附事。有る時の用意なり。常よりの家にて身
打事ありても。一家一つより出入事。ますくは
親魂の知者ますでも。手に合の程のなし。別に
なれんとの為なり。身のため。人の為。薬に
とる事を。なりがんず。金銀多く。積置きて
ととも。用に立ぬもの事には。誠よ。石瓦
同然の物なり。なるべし。其上石瓦は。盗人
無事な物のなれば。盗むも。心安かるべし。
金銀は。盗人の。第も所なれば。彩のごとく

おしき心から。石瓦同然の。金銀多く積て。番をさせる心。さぞくるしかりけんとぞおもハれける

我津衆目録

中巻 凡二十ケ條

○富貴貧賤に文なる心の話 一丁
○律儀にしてハ遊びも詮なき話 二丁メ
○富家の子ハ飢寒の心をしらさる話 三丁メ
○先祖よりの商賣をかゆるハ家を潰しぬ話 五丁
○子供に男女とも藝を教ゆる話 五丁メ
○金銀の延を請るハあしきならし 六丁メ
○金銀多く蓄へあるハあしき話 七丁メ

○身代を捨貫目限りに定めし話　九丁メ
○商人ハ先祖より代々の商賣を一筋にまもり通すこと
金銀をまうけんと思ふハよからぬ話　十丁メ
○心に欲をさハめて見ゆるはなし　十丁メ
○益またぬとていやしむまじき話　十一丁メ
○商賣に一ちいよぼるとおしく太きふるまひは
なるをおしさけなし　十三丁メ
○人とのつきあいハ苦樂をともにすべき話　十四丁メ
○裸で宿這入ハ仕合金持の宿這入ハ不仕合多き話　十五丁メ
○家督あらそひのはなし　十六丁メ
○或侍金銀を殖し話　十七丁メ
○或宿這入銀をもふけし話　十九丁メ
○或浪人渡世つまりし話　廿一丁メ
○或茶屋の宿持我勢のはなし　廿三丁メ
○金持性ハ格別のはなし　廿五丁メ

孫津衛中

○老人曰。常に富貴の家。又ハ銀持などに交る時ハ。氣のつうハ出りて。賤き身を。卑きやうに。おもひ持ぬ銀があるやうに。おもひハ迄。剰へ見るまじきの如く事までに。奢りつきて。身のほどよハ出さぬのこと多し。只愚かにして交りぬがよし。家ハ我と同じく賤しき方。又ハ貧しき方に交るなどハ。我が身の奢り。目ざめて。恥しき心を起り。其家業ごとに何事も。不自由する物語などこそけれ。

おのづから。愛敬の心を起すものぞかし。身の為
能き業なり。去りながら溺るゝ事を又人あるべし。
紛らはしにも悪しき人あるべし。たとひ人柄あしく
とも。紛らはしき人は交るべしと。いふはおのれより上へ
ていへば。貧賤に交るは益多しとの事なり。
又富貴なりても。よき人なるべし。交はりしよりのみし
ども。富貴に倚じかるは悪友多きものなれば。
能く心得なくては。交はりがたし。味ひ知りて。
身の分限を知りて。富貴を避くるには益あらんの

○老人曰。人の心は。たのしみの為に。遊びといふを
見るに。交は遊ぶものはなし。或はうたひ。浄瑠璃。
三味線を好まぬはなし。いそがしげに躍り狂ふも
あれば。又囲碁。連俳に頼みかけ。茶湯
とて一間なるせばき所へこもり。心を慰めて
手前を見せびらかし。客もまたかくのごとくなり。
蹴鞠とて。かゝりに立ち舞ひて。そこにも蹴
まりける。其ら業を名づけて。皆遊びといへ。
悦ぶ心のもなし。能く知るまゝば。何をせうぞ

つくねんとしてハ。あそびも。せんかたなきのおりから。
職もバけしき。いふものハ我が妻にせぬ事ハ
面白くて。志ざしたる事ハ。器用なりと大がほして。
おもしろからぬ事と見へしたら。鞠けるなどを
かりそめにも。教へをあげさせぬなれバ。かいなき事なる
なし。囲碁。連歌に氣をころし。工夫を凝らす
も。商賣職分に工夫といふ事を用ひる。寄席
そこそこ一間の内にあらあらゐを志めて居るハ。物さうぞうごと
まぎらかたるを要なる事なれども。茶の湯と寓すべし。

遊興となるなれども。家業も亦。其家の職ハ。同じ
あそび事の。能事と名が付て。いやまさる
ものと見えしたり。遊屋の子ハ遊び。其連歌師
のむすこの。ね撲なれ。三味線弾が細工の見世を
出し。商人の悴の太鼓持になり。たいこもちハ
薬屋店といふべし。色茶屋の亭主が。呉服やハ
するなる類多し。謀や沸尼の。せめて死しなるま
ならぬも。念仏まさぞまで。死しこ。願ひしこ氏
諺も鬼なるなの耶

○老人曰。富家の子といふ者あり。財宝ゆたかの
別る者共を。いふなるべし。生れながら今日まで。
見きゝもせずさめもなく。みづから一家にも終に
おかぬ者をいふなり。又父母の歳よりのち。主人の
歳にのる類も。皆是同じ事なり。此たぐひの人ハ
我がいふ往のるが。云義を述てその如く。皆むく
といふて。立る也へ。我がいふ事一つも無理ハいはぬと
心得違へて。後にハ甚だ不とも成れ。気まま者と
なり。かましき軍と号し。我に小言と

いふものハ。あやまりへも。よせ付けぞ。おのれがいふ
まゝに。志てさぞいふ者の共と。是をさるやうにするもの
なり。是等を亡し。家をうしなふ根本なり。
身を持ち助けらるべき者を退け。面使乃
ものと同心せば。甚だ悪くやうきや。恐しつゝしむ
べき第一なり。昔ものぐるハ。建武中一統の後。
大塔の宮。よし野より。帰洛しのち。諸将万卒
在かくして。宮仰ありけるハ。吉野熊野の
煩る。流浪の時ハ。我天下を鎮んとおもふ事ハ

なくて。何年只。汁かけ食一椀ばかり喰ひされ
ともすこしもいとひ給はず。結構なりし也。
名和伯耆守長年。かくて。楠正成と同座
にて。参内のおりから。長年。右の物語として。
宮といふは飢に苦しみけるとも。天下を志ま
しなどハ。鄙劣の至りなりとやいはれんと。正成
答へて。いやとよ其儀ハ。終に夕飯も喰ひはじめを
重ひける事有しとやいはれ。長年返答なく
黙し居たりけるとや。萬艱難を。実に志ある君ハ

堪忍して。ハ。身をおやますべき事。多かるべし
此事を申さに似たれども。道さ大理あり。能く
考へ見るべし

○老人曰。銘々先祖より請へたる家業を
このむハ。安楽を好む事なり。老ては家業を
身になる事を。一向に仕来の家業にて。渡世
なすべし。不時のもうけ。おそれをなすべし。我の
業にて渡世せんとおもふ兆あるハ。終に身代
相崩すべき基なりと志るべし

○老人曰。子どもに男女ともに。藝能を。教訓
をさんとおもふて。無益の藝を。教ゆべし。つとめて、
うたひ鼓のうちかたに。到て無益ならぬ職仕事一生を
奢らせをそくべし。全く是。自然貧窮の時は
無益になるべしといふ幾ばそ。いかなるとあり。職仕
事といふものは。勤めて約まり紀業まで。錢
もふけのもふくるものなり。何といふても。
商人の錢をもふけは。口先の働き多く。勇を
持るる事なし。故に職まで身をつめん。

根氣を。勞ひ。もうけにくき錢まうけほどの
事を覺へさせば。おのづから。全。根氣切なる
こゝろもちて。家のもとはあまくなるのしんなり。
女子は。琴三絃など教ゆる。手まあらば。是代よ
綿つみ。絲くりのわざ。渡世となる程の職藝
一通り。悉皆覚へさせ。根氣根を詰るはせ
と家の業をさなり。女子は他へ嫁するとのはならんば。
自分の病まで。いつ様の不仕合はなきも。
けらげなし。親としありて。思ひはかるむ。

能くあをとひけくのなるべし。さればとて。存よ
りかごとく。おながらふ。自然の身よ立んとにハ
あしく物じとも。覚えし居くそりとも。女は相応の
藝まても。害をあり面じ。琴三絃ハ。おちんご
覚えしおきりとて。益ありとも見えしかど。忠ののき
あしび。男ハ数すてらる能し。女ハ琴ゟきそ
そさくびを例しかたきのとや
○老人曰。世間身上。拾貫目ほの人仕合よく
年くおつ。延根出来。拾三貫目ほどあし

今おすて。拾五貫目よ成るべしと。後の作る心
あるものなり。又七拾貫目の身上ハ。追付百貫目ふ
なるそとし。後りゐり。九百貫目の身上ハ。程て
千貫目に成るべしと。ますちの作るなり。誰を
此るすれハ。まそくなし。此心ざしハ。釣家を
失ふ。さばしまうと思ひ。急度気を徒そそ。
慎むべし。あまとハ。つきぬものぞこのし。是程
事をまつべし。是家をやすれ必要なり
○老人曰。金銀多く蓄へあるハ。おし給ての

なり。或小商人へ。不意に。銀四五拾貫目。譲り
うけ。別して此男。元来稽習ハぬ。重く銀高く
見て。急ニ出したくおもひ。俄に工夫をなく。
商売仕廣げけるに。只二三年に。皆掛にとられし
それ〻の気が太さにあり。其の小商も出来ぬぞ。
雖銭なるうとぞなりける。又京都にて。名
有る町家の子息。身代仕舞て後。ある人に
物がたりしけるよし。其者ハいかく。家若年
の時。父母におくれし。伯父手代共の。育場にて

年十六歳まで。我身上何程の分限といふ
事を。しらざりしに。十六才の時。初めて伯父
身上の勘定を見せて申けるハ。商売小判高
金銀の外に。享保銀の時節。六百貫目余有
の銀。宅へあり。是ハ家内多く人を使ひ。夥
しき金銀を抱へ事なれど。自然其元若
とて。親代より除置しなり。此ほどくるも
此格式。変らざるやうに。身代持べし。と譲り
まし申されける時。我等若年のふして。不案内ハ

此身の身上。捨ても能き身上なり。むかし金銀
遣ふたりとも。聊身上の。いとなみをする事なりと
おもひ。それよりおし気なく遣ひけしに。のちには
つかふ身が。上手になりて。めつらしき。はのひ
何千貫目が。売せぬ身上のうへ。六百貫目を
流して。はや果し。終は見世店。手代まで賣て。
算用が足らぬ身となりぬ。是偏に。重宝へ眷し
生銀六百貫目の慈悲の鎌よりて。我等に
罰のあたりしとしぞんじ わさらめ。今は悔しく

なんぞ。悔しき。寔さもあらぬ愚なし
○老人曰。或人。我身上。元手銀壱貫目位
より取つき。随く仕合よく。其後壱貫目が
弐貫目になり。弐貫目が三貫目になり。七貫
目が八貫目と。随くまふけたる時が。おもしろき。
今は家も早や。安楽なる者の心。壱貫目も
身代の時と何も聊かる事なし。不自由にはつき
すれども。餘りもせず。それよりおもひ付。
いやく此通りにて身代大きになれば。後は

無世話の咄をこゝ迄述まで。金銀ハ山川も生ぬものなりとおもひ。身代拾貫目のものよ
殺しなり。其後倍金銀の延びたれども。家を求め建てなどして。百貫目余の延銀也。
いろくのものにふやし置き。今ハ昔に拾貫目の身代なりとて。夫婦子息小者も人下女迄人倍なく渡世楽くし。皆くらし居れし。
何様金銀ハ。あり次第に身持ひやしまて。何ほどあつてたとへ。たゞしぬやうよるなりとも

のこらずり

○老人曰。商人ハ。先祖より此商売を。只一筋に。おもひ込みて。無二無三に精出し。起り始めをふかくしても。強て金銀を。まふけんと。おもふべからず。我のごとくは。当こくに商売の外に要をほつるといふべし。商売のほかに。賣買をもの。損にかへし。借屋貸なんど。心当にてあるといふ。何いふべきのつきもしこれどちらともなるなり。教戒とぞ

○老人曰。人ハ欲を極めて見るべし。食膳
美味を盡し。何汁何菜が縦ひ二枚なり
なくべたてゝも。食する所ハ只腹をみたすを言ふ
ぞかし。家居も又。何ほど廣く綺羅を飾
たるとも。居る所ハ膝をいるゝの間とて。只一ツの
臥所の下まで也けれども。古き云葉にもあるらんや。
万事に不足なるを知るべし。なかなか心易し。
屋根の下に在て。雨露をしのぎて。朝夕の食を
喰ひ後ぞ足るのみぞ。朝夕の夜後まで。身を寒うせず。

悪のごとく。萬の欲を捨て知るべし。此外ハ榮耀
沙汰なり。扨不足の心を起し。勝手を願ひを求し。
百万歳の寿命に天地に満るほどの財寶を
持ちたりとも更に足る事なき物ぞかし。若く
ある大きなる分限者ありしが。諸仏神明に
祈る事。甚し。丹誠をこらして云。願くハ
日本国中。我と同じ職商賣の店く悉く
滅亡し。我が店ばかりに成りて。益商賣繁昌
江せしめ給へと。祈りけるよし。神仏も感成る

願ひてハおもひのかなふべきや。事足るかぎりをしらぬ
ものハ欲なり。欲にひかれなしとハいふ是
なるべし。これを溺しきものぞ。つゝしむべし
○老人曰。薬もたくぬとて。滅多に云ことの其
落しいやしむ事つらば。無用の所で。用を通ぜ
ぬ事。眼前あきらかの所なり。先ず考よるにも。
足の下迄でハ動かぬぞ。無用の地まではへ四方
八方自由をなすてあり。又人の面にてハ。眉毛。躰
まてハ背。其外の髭の髪など。無用なりとの所なり。

さればとて。世界中が。坊主あらまほしきものならんぞ。
脊に役ハかへられぬと。いへども。脊がなく叶ひて
身が立ざるもの。眉毛こそ入ぞとて。百姓や
町人が眉をぬらば。人付合のさまにてハ。あるまじ。
益よなきぬといへど。世界中此ものゝ太のかの益に
たゝぬものハ。ちらくなるらん。亦益よならんとおもへバ。
皆悉く相應の益にたゝぬものゝ多紀のあり。
家内に。かく里人あるも是らなるぞ。思ひ合すべし。
故なくて。かゝるにくるものでなし。親類あらバ。

何程難き事さへ。辛労にても。うらく。おちぶれども。
己よりこれをしのばゞ。うらやみも仁をたてども先祖より
是れしだ。皆子孫の末なれバ。されバ。先祖の先にも。
いかばかりの事の。不便に思しめさるるとおもひて。厚く
愛されべし。亦血筋をわけて。からうらみをいたさるるハ。
是も親兄弟の懇に睦じからあるべし。何ぞ
其多く故なくてハ来たらぬ事なり。親兄弟の
志にかなひたる人ハ。他人といへども。親兄の
心に悦び。安んじおもやうふと思ひ。厚くいたさる

無き事なり。此類悉く。よく/\しかうし
推して。志すべしことなり

○老人の曰。商人ハ。元手すくなく。よく稽古ある人ハ。元手
銀一盃に。商売するハ心苦労して。利分の
まハり。されども。功も多く。都て気だらけ。大きに
成りて。暮しも。よきものなり。能く工夫あるべき
事なり。又元手は自然の心。商売も却て損
多かりしを出来る者。ごのく世話のさしくすれを
悦び。僕多く出来る者をやめるハ。大きにことなる

私事にて。其余ハ元手銀多く持て。商売を
手せずし。楽に暮す時ハ。心大きに奢り。結句
栄耀が。たらざかし。扨金銀ハ勘定も。毎年
相応の。延銀すくてハ。手の廻らぬ事なれども。是も
亦大きに延び過ぎれバ。ほどなく亡ぶ乃本なり。
延ざるハ知れて。なりの理面白。のつびく先分上壱ケ
年の益入。五貫目入る家なれバ。壱ケ年ま
壱貫目ほど有るくば壱貫弐三百目までハ延銀
至極の程なり。又壱年に拾貫目分上り

入所ハ。弐貫五百目なり。三貫目位まで乃
延銀がよき程なり。是より推して知るべし。
かくのごとくなる時ハ。延あればとて。其のこ多
くの延すとあらざれども。延しも油断なくして
其益入はそ。引もどさるる故中々心をゆるさぬ事
なれず。能々考へ見て分別あるべきなり。
○こう人ハ。いかまねが良薬なりとかつらし
楽人曰。人を使ふ者ハ。若楽とも小。其の
かるゝ人と共に苦も。楽ども小。とるべしといふ。

苦労なるゆゑ。先づ家業を出精して勤めて。人を
使ふ時ハ。後の心なき者。苦労すれども恨み無し
楽しき事ハ。人と共にして。我身ハおのづから
まづし。かやうの事をいへば。見知事ハおのづから
遊山翫事をするとも。鬱をおさむるハ。我心にも
好むまなれバ。其心を推して。先使ふ人をも
さんにして。家業をたくましてなさしむべし。是則
古人の清教をあらはし。惣じて主人の業
快楽を好むときハ。此家の者も亦。みな

遊惰安逸をす。然ふやうになりて。甚見苦しく
安く。宿替せずとも。浮世にすこく。終に身代を
たふす事。あるハおそし。姉のく慎みて恐しと。
行の人は。安逸を教ゆべからずとそ
○老人曰。まへて宿這入の手代と見ゆる。小家
又ハ店をもちて。世帯を立つきたるもの。仕合
して業へ。今ハ誰しも呼ぶやうになりたる町人
多し。主人よりも多く元手銀など貰ひ。家財具
まで初めより満足なる宿でいふ。又ハ店ほど

なくても金銀を湛へ多く持て宿たゝり
去ある類。あまた仕合して。名を呼るゝほどよ
成りたる人は。すくなきものなり。随分仕合能して
初の銀を失はさぬ位が甚まれなり。是にても
あるべき道理なり。元手をも初の程にさゝぬ位
の分は。奉公の内より分をこらしほけて侍む
こしらへ。富たる家よりつゝましたる者は。元手を
多く。といへども肝要の分が使ひこなしてあるゆへ。
銘々の世帯にありても。ことになりやすく甚勤め

がたき記事。多かるべし。又金銀のつかひ方も。小ゑ
手のうち。随分つかひやう。歯かしやう。小月を立てる。
年をつく。すくなき金銀は大切なるものを
こらし。工夫を入れてつかひ申し。次第に増へ
たるは。かくまで増へても。金銀どふ孫へること。
名将の士卒をつかふごとく。孫とるく。だんだん
して。自由となるものなり。少もまがりぬ
危からず。功をうるものなり。初めより元手
者は。金銀のつかひやう。大かれ不調法なるもの

多しに身侭そて金銀の賄しやう。うらくてハ。
世帯持ぐかくのなるべし。されバ人を。つかふにハ
富る人なりとも。あしくバ。ほかにもの身を
持の手ぬやうに。兼て行の中より心とほけ。引
面ハし。ほかの事をべらく事ならん。其心得あれ主人
ハ。大きなる不慈悲の人といふ智らん

○老人の曰。或富家の息男。遊女ぐるひを
せざれども。元来衣服やうのもの。物好し
けるを。真しつかぬ事ならんといふ人ありて叱ぬ。

又かさハらまる人のいふハ。いやあの仁ハ能き家督
持ちされども。あまりどの栄耀せられぬを苦
にするといふべし。それしかしぬといひる人の
いふ。さそて其元の家督を仰らすハ。いのまる
事ぞと問ふ。答て曰。先あの仁。此町中で
此上もなき質株なり。そのうへも老くらうら。
御小田地を数多あり。酒株も所々にあり。是ハ
何より家督といふ中ぢやといふ。これ其
問ひし男の曰。いやとよ我ハ是を。ひとつと

家督とハ。ぞんぜず。是まで多く。其家督
もちながら。つひやして皆なくし。何も
家督らしき功。いさゝかもなし。されバ我等が。
家督とぞんずるハ。銭金を無益につかはぬの。誠
の家督といふものなりと。ぞんじ候と申されしバ。
満座手をうつて。かんじけるとなり
○老人曰。或国方の御家中に。何の某とかや。
七八十石も知行とる人。誰もする銀持なり
けれバ。或時常く出入せる町人集りて

いひけるハ。何となされしバ。さやうに銀が出来ますの
ぞやと申されしバ。此士申されけるハ。我等ハ元来
金銀がきつひ好きゆへ。たまりしと申されしまゝ。
町人の曰。誰が金銀の。きらひの御座るべきぞ。内輪
私ハ甚以大好きますれども。中々たまり
申さぬといふ。士の曰。いや〳〵其元方ハ。さのみ
仰らるゝハ。いひますれど。凡此御城下に。獨も
金銀がきらひしさ人ハ見うけ申さず。扨好きさ
嫌ひし人の訳が一向合點がゆかぬと

みしろ。語りてきかせやさん。先其緋ぢりめ
嬶もひとつ訳ハ。何ゆへそ。かしがる事。ほし
けれバ賞る。ほめバ買ねバ賞ぬ。賞ざ銀ハ。通るなり。
此むしろよりて銀の。えらひの訳ハ嗜こへ申べし。
又我等が好さとやハ。只金銀ぎれゆへ行もかハぬ
なり。自然不図勤で遠くほしく。おもふ事
あまバ。金銀を出し見るに。いやく此金銀に
成るとのなしと。おもひ。賞る事を。やめにせる。
是偏に金銀ぎれぬるゆへ。おのそのハ。たまふも

すれるさ所なり。米ハ旦那より貰ひハ。此入を
量り飯汁小塩菜。扨く味噌の汁を吸ふ。
是まで身の奢ひ足りぬ。衣服もおを勤める
どれハ。旦那のお用なれバ。一通りこしらへ家紀。
是を用ひ。大事にかくる故。其一通りにて。めつ
よそなる事もなし。常ハ刀ら取ら。ろつれをさそ
着るに。是で事を暑も。志のくハ。事足りる。
そし菜類が起れば賞て其一好さ乃銀が
減りてもおもふ故。少も不自由なし。又我

金銀が好きゆへ。女房下男下女までも金銀
ずきなれバ。我が氣に入らぬ由へ。召遣ハ。そればゆへ
下女までも下男にても。飯汁くハせなくに
飯を。くらハせ。あぐらハ。ねまれバぞ。背しくからで。
起こし不自由がる事なし。是もおのづから金銀
がなきよりて。後の切米を誰もぐいのだまり。
このくきれさへきれバ。たまるものでもなし。かく
られバ。右の町人口を嗜みて。ゆるりとなし
○老人曰。或所の宿這入乃手代。上京名とまに

て。渡世をなりつき。裏借家三四文の所をかりて
住けるの間にて一向火を焚かず。近所の餅屋
にて朝毎に五文どりの餅を三つ買ひ。茶た
ばこをも是にてたべ是より商ひに出。下京の
主人の所にて休息し。ゆるりと小座敷は餅や
ほそ又五文どりの餅三つ斗たべ。茶も貰ひて飲。
ただ己もゆるりとして。扨我が家に帰りて
夜ハ一向火をともさず暮より寝て身を休め
けるよし。先年一円にて給料よまるころぬゆへ。

働さの揚手すともよし。其心ある男なれば。商ひに
かしこく。此所に合る器量代物をもとひ付。賣買げ
この仕ざまもたのびしと。人一倍にするが。かくて四
五年の間。大きに分限者になりて。諸人と呼るく
勢ひよすらぬ。此算用をおもひみるに。凡
一ケ年の通の入錦代錢拾貫八百文。宿代四拾
八匁都合。享保銀にて百八拾目斗にて。是人の
世帯たるはぬべし。何様此心を推て考へみれば。
是われらの事ハなくとも。誰ヵ渡世様の。もふけ

なからげんや。何事も實に心のいらざる所あるゆゑ
○老人曰。或國方の御家中。仕業不忠にて難
まて浪人せらるゝ。親子三人京都に知る町人を
便として移り住む。此浪人の身となりて。何
一日を送るべき蓄もなく。困して是まずぐ。何
をとり渡世の業を覚へる事もなし。あれ
其頃の縁に。何ぞ家業をもとめて得るべき
やう職を入るよし。漸木綿糸をくる事のみ。
覚へる業なれ。是まで此を儲けし處も成るべき

やといひけれバ。町家の亭主。心づきて。いかなるものを
先当分さへ拵ふべしとて。上下京まで。うら
借家の下直なる所をかり請て。夫婦三人居て。
渡世なをぞ始めける。去れども細き職人三人
まで。僅なる精出し。一日に銭五拾文斗。もうけるが。
此浪人つましく。渡世の掟を定めけるが。宿代月に
銭百五拾文と定め。此割一日に銭五文。米代一日に
三拾文。油炭薪代拾五文。凡かくのごとく。毎日
算用して。暮しけるが。元来士のまそてゆく。

しかも親子ども皆。朝も湯すて手水をつかひ
けるが。先釜に湯をわかし。親父つかひ終りて。其
湯よりもとし添へ。母親娘女人つかひ。其のち
右の湯は釜へ直に粥を志かけ三人朝飯とし。
其釜の下に炭を一ツ埋て置き。釜はわくし湯呈
さめざるやうに仕るしなんどして。かくのごとく。細かに
心をつけ用ひるゆゑ。銭五文が炭まで一日ゆるしくと
足りけるよしなり。其餘は悪くしあるまじい。いと彼
あらむぞ。推してはかるべし。扨次才にんづけ。

職の事を営へ。後にハ三人。細物を商ひ。大分
能き職者になりて。家も表借家へ出るほどに。銘く
一日に銭百文づゝ。のけたるゆゑ。後々ハ家法ハ
前のごとく。一日のまうけより一日の入用に引分させ
いふ所より。相応の開帳参りをゆるしけれども。
是を銘く一日に銭百文をまうけざれバ。損ハぬ
といふ小法を立たり。志れバ開帳へ参り度
おもふ者ハ。未明より職をして。一日の事を。さり
こし居ちて。いまだ百文の價足らざれバ。すまず

帰りて夜を籠て一日百文の都合をなし。
子孫に一日の中。銭百文営までになされけれバ。
其後ハ体よはき八続手に体ませける。かれ
ごとく法を立るゆへ。今に至る頃ハ余程。銀子の
蓄へを出来。渡世を心やすく。楽しく暮らし
けるとぞ。誰しも。かく身を修め。算用乃
出入を能く弁へ志らバ。渡世の便りとなるべき乎
○老人日。都の辰巳。宇治の里に。或多葉粉屋の
弟子ありけるが。歳十五六より。主人を守り。

廿三四才ばかりまで。こゝろ
さしたる悪事をもなしけるが。不図主人の氣ニ
違ひ。暇出されし。破草鞋一ツにて。京なる我ニ
の方へ来りて。よろしくのよしいひて。其なる
ゆへ。扨此方ニなるハ。先手なる所ニ出るとてを
着替一ツなくてハなるまじ。用意するものと
向へば。如何なれど私宅治へ奉公ニ来ひてより。
又六ハ年こそ来ることいひものの。新木綿足袋
又六足。帰んがし四又まし。扇子又六本。半帋

十四又怙負縁。其外仕着せ悪く宅へ戻さ一ツを
そこなひかさぬど。只今は御座ゐへども。此度主人の
氣ニたがひいゆへ皆く差りかきにてふたつま時
我等老人見るに。彼男一向だんしで行を存る
なりにて候かいぬ者なり。いま度御白さ不あれ
ば。方をも物べきころのと。ならひせ話いたし。或
年昼へ一日銭百文与るまで。食事ハ先方ゟ
賄らして。流のハしけるに。二年斗勤めけるが。
或時此方へ来てゆるハ。私も別宅致し渡世

いそしかんやなれ。何とぞ呑込ませ下さるべしと
いふ。それしハえ手もおく多くてハなかりけれど。それ
心底を旨事まやし移てかへしバ。すりほどれバげ
まそ。凡銭六七拾貫文も。有る銭蓄へこしある
ましやけるまゝ。されバ鑄手に宿を持かへしと。因ゝ
いそし。下京烏丸小家をかりて住せけるが。其後
妻をむかへけるに。似合る夫婦よあるとて同じ
くの御悦ぶりまそ。夫婦の中夏うるさしこ一ツ。内
ますてハ女人とも。古木綿襦半小。着ぶれしけ。

其亭主の悴子ハ。商人形へ行く時の。用意とて
爰へ々。我ホ玉也秋る九斎小業らん。営つよく
也さ。表の戸を志め。内より火をぞさぬと見ん
えくる。人を見かけて。いつとても火をとさ
躰なり。秋ハ着かし身を息ひ。朝ハ未明より
うきあがりて。仕事をはげむ。女房ハ宅営
なうて商人家業おも油断なし。宿這入りし
四五年立て其町内。金百両斗の売家あり。
其時彼男。我ホうとへ気やけるハ。此度町内の

賣家求め申し候へども。今まで銀子不足候は。
あいまい。志がらくの内。御借下されしは。忝なるべし
といふ。此者の致方宜敷ゆへ。我等も銀弐貫目
かして遣しけるが。今年まで六七年三ケ年
まで取りやりに添けるが。銀元利相添へ皆済に
参りける。げにて家を私がものになりしとて。昔
すじ道悪しき様び申しき。孫家我勢者なり。誠に
身を持つ者は。一時も是あるとし。皆もまし
○老人曰。銀をつ性は。捨べつのものなり。上京

辺なる所に。さる老人隠居して銀拾貫目のけ。
此利足を小づかひと定め。息男へ渡し置き
て。其身夫婦ハ。飯米壱升弐升づつ時々に。
其外銭百弐百文づつ。是もおくに息男
より小遣を貰ひ。右の利銀一銭を。必とらで
息男へ先預け置くようにて。聊清のかハ。
或時隠居をとめげて古蔵を建なだに。入用銀
志なるべきようし。人のいひならんぞ。彼老人のいひけるハ。
悴ハ実体者なれば。今一代なりしかりそめの

迄ハ大きに賣べし。其時買人のこゝろ。賣人乃
こゝろ。十調が揃てよろしかるべしとて。十調が自然
に背られけるよし。然し心ありて損料
あり

我津衛目録

下巻　凡十四ケ條

○世間に仕合よくて家栄るを羨む話　一丁
○商人ハいかにも欲おほきをよしとする話　二丁メ
○人の身上不如意なるを再興する話　四丁メ
○身上たもちえぬ秘伝あるはなし　七丁メ
○あそび貧乏のはなし　八丁メ
○身の害となるといふはなし　九丁メ
○或若き男迷書より縁しさ話　十二丁メ

○若寡婦こゝろえのはなし　十四丁メ
○老人小児病人ハ心を用ひ養ハねばならぬ話　十七丁メ
○我子又ハ家来を打擲せまじきはなし　十九丁メ
○倹儀用心のはなし　廿一丁メ
○若き人ハ老死の無常を知り長寿ハ無常を
志らぬはなし　廿五丁メ
○背ぐしの吉凶談ゝのはなし　廿六丁メ
○或貧泰平を祈りし話　廿八丁メ

高漆談　下

○老人曰。世間ハ産業仕合能くて。家富どし貴ある人あるをバ。是を羨む人多し。一通り羨しくおもふハ。通用の人情なれバ。さもあるべし。強ちに是をねたむ人ハ。無理なる恨をうけんことなり。却て分上被滅するものなり。偏に偏怠老たる事なり。俗諺に。圍碁の勝負も心持んと打勝ハ。負じとうつべしとなり。

金言なり。おもひ合すべし。只万事むかふへ。目のはくが諸人の通病なり。家を賣んとせん
より賣らしぬやうにする方ぞ。身上持ちの上策こ
いふべし。ふとき宅をとひうるものあり。今こゝに
三条より五条まで。その川の西方と。めぐりに垣を
結ひ。一方に入口を明け。其入口に番人を置き。
往来の人に。此垣の内へ入すべし。内へ入りたらん
人には。悉く封じたる札を渡すべし。其札に本
二千あり。假令幾万人にても此垣の内へ入まし

人数其札を此方より指図の節。一時に。記し
見すべし。表示を持ちたる人は。皆裸として。夜着
懐中させずのまゝで。此方へ通すべし。其中に唯
壱人。六方下を持ちたる人あるべし。其人へ右衆
表示より残るほどのを。取りぞや分るしと
いひてきめば。其垣の内へ入たる内。さして此
垣の内へ入たるまばならぬといふ義理も無し。其
内へはいりさへせねば。外の者の事にて。無難
なり。何程分別するものまでも。その垣代

内へいられざる所なきものとハ。おもハれざりし。かく
られし。それとも若忍入人あらバ。畢竟いそぐ。
それハ大名屋敷へ金持の追剥が大勢出ける。
今夜も人引行て。此者どもを捕えて来れと
いふと同じ。恐縮し穿鑿。さやうのもの
評判ハ無益

○老人曰。若人ハいかにも欲すくなかるべし。
欲ふかきものハ皆身上を持さざるものなり。欲
すくなき時ハ。利を貪らずして。賣物ハ高利とる

事をせぬゆへ。物を賣る事も。少しの利徳にて
元銀を失ふてハ。なりがたぬとおもひ。先賣先を
能く吟味して。慥なるけれバ賣らぬなり。
賣物念を入。利をかるくして賣れバ。買人ハ
こゝろよく集るものなり。又物を買ふ事も。欲ふかく
まけさせ。代物念を入させ。人なみより。よく
吟味するものども。拂ひに至り。重なく。相對に少を
違ふ事なきゆへ。向の賣人も此方のいふにまかする
所ありて。是を大切なし此方の氣乃はたらぬ

心まで。むつかしき念入ませて。くるやうに。するものなり
是又人に悪まれぬ徳なり。欲ふかくなきものハ
奢りもせず。奢らざれバ。銭をもふけずとも
身上相応にくらさるゝ。その入たりぬべし。元来つゐへ
事をあてにせずして。もふけたる金銀ハ減る
といふことなし。欲が嵩うて。身上しれぬ
といふ証拠をいはゞ。先欲心ふかきものハ。はやふ
儲しとおもふ分限の了見。銀をもふけても。たてこがるゝ心へ。
いまだ金銀をもふけぬさきより。つかふて居る道理

あり。それでハ身も家も持たるゝ物にあらず。
初めハたらぬ算用なり。それゆへ我相応に細き
商ひが。漸くに儲なくなりて。或ハ米市にかゝり
金山の趣向を企て。我物でもなき。そのかをあつかり
あそびして。銀がしふなりもどして。終にハ其
身のをそハ飛鳥の死骸同然なりて。何こへ
いくやらしれぬものなし。是欲でハ身を。たも
たれぬもの也。能く考へすべし
○老人曰。凡人の身上。不如意なるハ。気立る

事ハ。樹木の枯かゝるを生るがごとし。先太
木の枯かゝりしをも。その節ふて。うらげらし。
或ハ杖などゝもし。扨糞を入きて生さんと
するふ。悪活ぐく枯るゝのあり。総りふ太くに枝を
まゝ生。本末までも。色ぬけ切て物白事をなり。
又樹木ふよりて。楢の木の類ハ。悉く枝をきる
時ハ却て槁るくなり。此所の大事ハ。本末とも
性と生氣の。うひなきうち生氣よいまだ強き所
有のといふ事を。能く考へ見て。扨この木ハ

日なたに植てよけれ。土地ハかはけるをよしと
するもの。又陰を用ひて能きる。地ハうるほひ有の
よろしといへり。細かに考へ又植へやうに。おさく
植てよきものあり。如く植て能きものあり。陰を
好むものハ。ひやし湯を好むハあたゝむ。性ふより
て皆くおのづから違ひあり。水よくしく日数
画て植ゆるものあり。幾日も日ふほしつけて
うゆるものあり。時節小名く不同あり。迚く
して利あるものあり。急ぎて利あるもある

べし。是等の工夫の用ひ心得て。至極肝要也
これをいふといへり。栽培といふて只植やうが
大事にて。こやしハ次の事なり。植やうがあし
けれバ糞養をしても生ず。是生氣が根ならずして。
糞ハ誠にたゞ枝葉の事と知るべし。惣じて
木ハ。切込もさてあしき事ハ。少きものなれども。又
枯るく。殊の大木に成べき木を無益に。切込めバ
結句枯しさせて同然になる事あり。此段能分て
むつかしき心なり。然れども。事多くさしにあらバ。

樫木身代と。柏の木身代の二ツのたとへにて。其
わけを知るべし。樫木身代といふハ。元来生
氣強き木の中へ。其木も強く切り枝ハ一所に
切すて捨るとも。来年ハ忽ちに。活々と若芽を
ふき出す事。うたがひなし。かくのごとくの類ハ。
強く切り込むが利なり。又柏の木身代といふハ。
其生氣も通じにくき物なり。されバ其木の
枯味を能見立て。一枝か二枝か。中に小枝さへ勢ひ
ある枝をのこし。其外を悉く切り捨て。枝葉を

はなはだしきは弱らず自由べし。かくれごとくきはなれ。
残りたる枝。終に栄へをうしなふ。却て糞ハ甚よ
まだ残る肉ハ却て。かれらとのなり。糞ハ心より弱さ
うこをとうよしこれ。人の分上古く多かれバ。その手根
減りて。ぬけくち多くなるものなれバ。すべてハ
樫の木山ひ松なるべきもの。されども商売損
又ハ織方までをも。よれ志ふせの株あれども。その手
根すくなりて取つづきなりたる。或ハその身人。
仕来りの事をやめ。何までを新規に織ても

商ひまでも。立附商ひ業にも色々類あり
是等が柄の末分代といふものなり。枝を切
尽してハはるかによき事あり。此心深く此
味ひ有るなり。極口伝をもありとこのや
按に曰。枝こハ商売が事。其外諸附属ハ
万物入りなり。糞とは金銀元入も此事なり。
樹木の陰陽を弁じ。土地をさぐし。肉色を
志る事が第一とハ。行よりと正面が肝要こ
いふことなり

○或老人身上たゝまぬ秘伝ありといはれしけれバ。傍なる男。それハ何とぞ我にもと。教へ給へと望みけるに。答て曰。されバそれをいふと考へ見給ふべし。元誰でもたゝまらぬものなり。裸で生れたものハ落さぬ道理なり。我有ものだけ皆に出してこそ。人に損かけぬかゝるものハあるまじぞ。人に重恩をもおそれ。金銀のる故に常にたゝまるといふ事なり。一銭も借銀せざれバ。いか様になりてもたをれじぞ。

是が則大事の秘伝なりと一句も添ず。此男大きに発明して曰。扨く有難き御教へなり。只今まで銀持となる人〻を見るに。悉く多くハ。借銀持なり。たとへ千貫目持の身上も弐千貫目の借銀あれバ。銀持の事ハ扨置ぬ。初めより千貫目たらぬさん用なり。誠に恐しき事なり。我等ごとき借銀百目か弐百目の銀持にて。一銭も借銀かけねバ。是ぞ真実に百目弐百目なれど。銀持といふ

ものなりと。笑ひてさりぬ
○老人曰。世にはおなじ貪欲とて。身上ゆかぬまつりごと。いろ/\と。せがく者あり。もがくほど火が盛になりて。身がおしく焼るゝ。いつさたとへなり。又炭をたちて強くあふげば。おのづ猛急に滅るといふ氣味もあり。面白き事をたとへなり。往此類の譬あり。近昔四条川原にて越後掾といふて。唐操人形の首引する見世物の此人形見物も首引をなさしむ。行人いつまでも人の

引かじとつよくまりて。おの方へ引なり。元来。轆轤まはして。志けるが。ゆる/\とくりゆく。引と却て強くなる。引ハ猶其通りなり。これを比していへば。人の手に持するものを取んとすれバ。向の人弥つよく握りて。はなさぬなり。此方にゆるし欲心をやめば。向ハおのづと手をはなすまでに似たり。惣じて此たとへハ多く我ごとくいひて。却て身をくるしむ事をいふ。貧乏の事ばかりにあらず。万事に通じて是に類する事

あるとの事なり。此気味を吟へて用ゆる時は。極て
益ある為めしあり。是悉く挙るに。其を
まねるぞ。略し侍る。能く心をこめて工夫あるべし
○老人曰。世の中に喉の呑込さとて。未
来りもせぬ事に実のごとく。或は腹立。或は
恐れ悲しみ。又は悦び苦しみなんどして。
向ふに何とあるやら。志れもせぬ事を自分勝手
様々の事を。たとへども。元来なき事なれば
違ひ。後のつまらぬ事多し。ここによきたとへ

あり。むかし木綿屋八兵衛といふ男。丈夫京都
側に住居けるに。ある夜夢に。此八兵衛金拾両
拾ひ。大きに悦び。おし戴き帰ると見て。忽ちに
夢さめて大声をいだし。女房をおこし語て
曰。我夢にも此度金子拾両ひろひたるを
いふよ。女房聞てそれは能き事幸ひなり。
其内金子三両貰給はれしといふ。其時男
大きに腹立。我汝に得させんと思ひしに。此中
又両は古借のかへしに払ひ。汝にも壱両は。とらせ

廻し。飾りハよれえ手こそ出来られしとおもふハ。
京の奉公へもすれとのうはさと志らせくれしぞ。女房
儀ま。ワヽ里受を出し。毎日貧苦の中をも
いとハず別れそふ看ふ代多くの金子の中まで
三夜四夜。我ハすやしも。此御親の事ハあるべき。
情うれ夫の心や。さぞふり我を見せてすかの
なんど。うらみかこち隣家も驚く汁まで。大声
まで。すこさけびうれしバ。隣の人寄り来り見ん
ませバ。夫婦つかみあひ。うつやらたくやら。めん

かゝ騒ぎ。嫁かましひすんだ。是ハちんご夫婦
喧嘩ひまへ。いかなる事ぞ。子細こそあるらん。
譬へ若へといへば。其時八兵衛こゑを改め扨
く夜中不図の騒動隣家まで御苦労を
かけしぞん。気の毒に存じまする。此喧嘩の起りハ。
夜前金子拾両拾ひしハ和ほ是れ心よりも
御座れに付。女房どもおもしろがり金子を夜ハ
くまで下とやりたを。女心の浅ましさ。夜別もなく。是非
金子を三夜くまでもとやれに付。三夜来てしいてハ

跡の工面は迷惑に付。指ぐ小やまざめはへども
少も笑入りさんぜ。我等ハ。むさがりつき。色々
の恨をやりけらま。男の一分たゝぬ訳よなり
ひて様が立ちやひゆく。おそづのしまゞ。此仕合
ともしれば。萬家の人やけるハ。扨ハ金子ハ
夥しき事で御ざるが何方で拾はせらしと
いふよ。八兵衛やけるハ。いやさ是ハ夜前の夢で
御ざるといひければ。一同に人おかされて。如し
かりき。跡のごとく後に咲けれ。おかしさやう

なりしとも。日ぐにけし事小仏てる事多くさまの
なり。地獄心得なるべき。たとへなり。こくと
ろよ志るし置きて忘るべからずそこ。慎べし
○老人曰。或所に家内三拾人あまりも暮
らせる商人。主心得よき男なりけるが。其
不幸にして。三十四才にて死去しけるが。其
男存生とて遺しける一通を子共に得るまゝ。事
多くのうちで。以五ケ條なり。初三ケ条も面白き
事ゆへ。今ハ覚へ得る後。二ケ条ハ其家の事

また惣家に用る几事なれバ是を略しぬ。
先達一ケ條に曰。世上幼稚の子共。若寡婦
など家治まざる事多し。是偏に男女乃
婬乱によりて也。されバ家を治めんとならバ
家内男女の行儀を正しくすべし。女ハ貞節
を守るばかりにて。外の事ハ一家手代惣領
一統正流の了簡に任すべし。何事にても表向
の事ハ少もいろへ。女より下知出る時ハ牝鶏乃
あしたすとて。即時に家を亡す事。まゝあら

なるべし。勿論世間の人の。いやしきものゝ多き
ゆへ。かやうの後に。いろ〳〵の。わざはひを起し。
終まるものなり。其わざはひ乱乃根となる。
末わざはひをうくるといふハ実にすえ事といへども。
まゝあらバ。しき事ありて。わざはひハ家におよぶぞ。
終まで。わざはひハ命の情よりおこるなり。
重くつゝしむ時ハ。何ぞ災ひをうくる事あらんや。
家の治まるも乱るゝも古今只此一事にあり。然く
恐れつゝしむべき事なり。其二に曰。何事も

面々我意をはりても睦まじく熟談の上。道理に背ざるやうに致し。一家中始。出入事縁之乃害までも。むかしねん有やうに。こゝろはひやかるべし。看坊人雑しきへさし定る事寒よ編しかるぞ。皆々の心と合せ。自人存生乃ん精すておくべし。何するにも。熟談を致し。正直よ変ある所あるべし。甚之不日。番頭。宿這入時分ゆる者。引きとめ置くる宜かるべし。指ますとも所務引こもる事も。附営尓

よろしかるべき事なれども。甚しき心得は六ケ敷事なれば。自然引きこめおけば下はすまぬ子細あれば。皆々能く熟談して念を入申さるべし。たとへば一きは留め置くとも。早く引きこめぬやうに致し。宿這入いたさせ申事なきやう。是人を。そこなはざるの術なり。先は宿這入時分になりたる者は。帰宅なく追て別宅致させ申儀も御座あるべきなり。主人の親類雑とかりわきまへくは事。右の家内は三ヶ條を能守らば。幼稚なる子を

さられて家も繁昌致し。家内穢らハしけれ
世のそしりをとるべく。人もそこねぞ。能く治ら
誠ハ免ぞうられ。是をもつて。つらく思ま
いにしへハ世を治めむにも善法を立てたまふ外
なしと賢き人の仰もし。かかる小事にハ
どもと。家法の能きハ甚だ大事と感心
致し侍るなりと語りまし

○老人曰。惣じて若寡婦まで。家相續
なりがたけれハ。其一家の老人。寡婦ハ氣質を

見きハざるゆへなり。其女ハ寡婦を立てべきこと
問ひうとも得立つまじ。ひと人ハなすれどのなり
尋ぬるにハ及ばずして寡婦を立る所さん人と立つ
まじき人とハ。平生行を能くける事のなり
其立つまじき人の親に随ひて寡婦を立てさする人
見けとなれ事なく出来て。悪名をとるも。家を
亂すやうにするものなり。さやうの人ハ初めより其
心根を見て。本意なる事にハあらねど。後日ん
ずそら後妻を。いけるにハ。さとむそうがなけれバ家なるべ

一向へ再縁でもさせましての。其女の力業に勤
まるやうに。はからひ侍らハ。まさしき幸なり。その
はからひあしくて悪名をとりゑするやうになるハ。
いと浅ましき事なり。寡婦まして家を立るに
何ぞ六ヶ敷子細ハなし。只女ハ女の道を守るにさへ
身を持てバ。家ハ何事もなく。おさまるものなり。
其女の道といふハ。随分柔和にして。身の行儀
正しく。頭より衣類履まゐるまで。厚篤にて
それが賤んでも非難なく。言葉にも少も言ぬなる

言をいはゞ男まさりを。せぬぞ白粉けのなきこ
いへども微塵のけのなきを。うけぬやうに立
まはり。身持直にそ心よく。かくのごとく明白
なる人ハ縦ひとうるとものにおしぞ。このやう
なるを和順貞固にして。能女徳を守る
人とハいふなり。女ハ此一徳にておのはなる表
さして入用なし。先年人のかたるをきゝしハ。東国
或富家の寡婦。京都一見のため。上られしが。
此寡婦甚行儀正しき人にて。常に夫の

畫像をかけ置。それより事ある毎に。生るに事る
のごとし。其頃は出家の活徳足の時と。右の画像
の前に手をつかへて。私此度東都一見に上り
申度候ぞんじしを暇乞をなしていさいひ。扨着
東路の旅の苦労ハ。御随ひぬると。是旅中の無事を祈る
下さるべしとて。旅中も婚姻。加る故道中の中も
むかうなりける。存命の人に對すること。
奥の様子も察し。見るとて孝子の節なし。右の御噺
も。彼なりける。胡蕾出るにも噺る

されバいづれの所へ參らひ。只今ハ御くらひと。いひて。
懇に告ける。一々の行儀ハいかにも及ぶなれど。事
繁ければ略しぬ。此人廿五六歳より寡婦と
なり。壱人の息女なり。養子息子をもらひ。今ハ七十歳
にて。三歳にならる男孫もありて。難なく。家と
業へ分らしてぞ。是偏に寡婦の徳正しき故によれり。
世の寡婦此人のごとくせば。いづれの家を治るなり
べし。是より讃歎人多りといはれし。世乃中
廣くしらバ。かく有ける人も有るまじき

○老人曰。老人小児病人等ハ諸人に格別に。
心を用ひて保養せざれバあやまる事多し。その
事ハ繁ければ。いひ盡しがたし。宿醫。老巧
又ハその事に熟したる能者などに。兼て尋ねおき
まかすべし。或ハ假名書などに。さやうの事を書
たるものあり。吟味して用るべし。前方
或所に當座菓子を見るにつけて行しに。
行かくなりて。痘出して。やまず。その後へ。情達
論り。いたく療治しけれども。醫者にも。其乃

わざれ給ひのゝしりて。終に治せずして。其夜。痘
疹に死たり。死して後着物をぬがせたれバ。縫針
肩先に立ちてあり。是全くその針にて痘入
たると見えたり。いと痛しき事なり。又ある所に。
十四五歳の娘。風をひきたるを。志らずして
後に腫物出来しけれバ。勞咳の療治し
たれど。不治なりし風の。志らずして引けば衣
服を脱がせて見たりしバ。大きなる虫のおどろき
衣服を着せしなるべし。皆時に癇癪

しつることあり。按して不分明の病人ハ。按手
脊腹手足ともに。凝滞ハ。なきやうなれど又ハ。ちいさき
腫物ハ。なきやうとも。是を能く吟味する事なり。
凝結ありてとも。それも。うかくとしたる分にてハ
見しれぬものなり。只肌膚まハ。あらはまでぞ。探り
てしも見しるべし。病人も覚へまじ。又腫物なしとも
初めの程ハ。さして熱もなく痛むことも。かゆみも
なきに。人ハ腫物の根するものを。さもるぞ。只気
分の事起りの。食の合ひ難きのと。いひて遅滞

まるるに。むかし起りのにするもとをあり。淫乱の
なしぬものなり。是等の事に。かぎるぞ。飲食
衣服までも。心を清く慎む事多し。又人までも。
つかひ身揉すかし。常に老人小児病人の傍よ
侍り。ゆへ人へハ。熟しといふきうせずく慎む事
なり。心得たまへ慎しむべし

○老人曰。按して主親の身として。子供。
又ハ奉公人すぢあつかひ事ある時。折檻とて
打擲し。又ハ指にて其者の身を強く捻り

なまじきる人あり。是ハ甚よからぬ事にて、かならず
世俗に云事なり。むかしハ子弟従者など。教へ
いましめとて杖にてうたる例しもありしが今時ハ
人甚さうし云ゆへ打擲などせしむ却て心僻て
性あしくなるもの多き方へハ行がたかる也。
若あしき事あらば成長の者に。いひきかせごとく
密によび懇懃に。いひきかさば必ずこころ方を
痛く入り。よく改る者多かるべし。されど又たとひ
いか程の分限者なりとも下々の者とし

子弟従者を打擲するハ大きに無法の事なり。
従者ハ不届あやまりて手打擲する時。童小者などを
あまた下女などをあまた罪死せば。いかばかり悲べき。若輩く
打擲らし勘当禁足ハうとましと云とも。その
うたれし人罪ある時ハ。いかにいふとも訳ハ立べし。此
事をよく思惟しおそるべき事なり。是偏に
常に生死の道理にくらきゆへなり。総て人ハ
打擲ハ道さしとも。いつ何時死ぬべきも無
ねものなり。然れバ不届なる者の死期にあたりて

附若小野捨子どもしハさんも、けうりがくし。
此事をよく得心せず。さやう無法ハせぬ
ものなり。我若かりし時田舎に大きなる
商人ありしが。其手代童を見んまゝとて
鄰まで来りしに不首尾ありし所や。あしこの里
なん。又ハ定業なりやおかりけん。所に死しけるを
急病にて死したりといひしめ。ひそかに事
済ミたる主人ハ其捨子好く思しぞ。御しうの
夏野ハ道まがりて其家事あらす。

打殺しる手代ハ一命をうしなひ。主人ハ家亡び
其身流浪しけるし。そく傍へ伝ゆるなり。是を
もって人を。うち捨る事ハ大きなる無法
なりとて事を考へるべしと。いましめられぬ
○老人曰。傍人咲。むかしより銭儲といふ事。凡
四五十年の前にハ。おかしきのことぞ。御事ハ法人萬萬
甚用心せねばならぬ事なり。我祖父母も。
常に香物など漬させ。或ハ干菓子。
芋の蔓を切干にし。もしくハあらゆる干物を

賤人等まして。を。若輩なる者どもハ。それを
見て古流たりとて。無益な世話を。せらるゝこそ
嫌ひしか。何事ぞ。いはまくハ。其方じやとハ。
むかし饑饉のおそろしさを。しらぬ人なり。
我若かりし時。大きに饑饉の年ありて。幾万の
老腫に。なりて巷に數多。餓死しけるもの
其上穀乃價も。高かりし。必飯粒を。麁抹よ。
まする。米ハ勿論雜菜の類にても落しなさるな。
洗ひて用ひよ。此頃ハ途中小米のこぼれてある

所をあり。又辻々に飯を捨てある所もあり。かゝる
事ハ尊からずして饑饉あるべし。古老乃いひ
傳へに途中に食物を捨るやうになる時ハ必。
凶年近しとかや。痛ましき世のありさまなぞ。
怖がりまして。果して享保十七子のとし。西國
より京都近國に至るまで。大凶年まで。稲ま
うんかといふ虫入りて。大かたハ枯腐りぬ。其時
頂上米直段。享保銀にて。白米凡百弐拾目
位までかゝりぬ。一日ハ一向米屋中売もを

賣人なし。京都の或家に、其時大きに難儀し
たる人ありて。借りたる銭數年。飯米ハ
折く弐三石づゝ。小買して米屋へ預け置き。
白米又六斗宛取よせて。つかひたりしが。翌
丑の正月右の米直段の頂上より小あきひおりて
小買の飯米大かたにつかひ切りし今日ハ買ハね
ばならぬと。おもへど。餘りの高直に呆るゝハ又
さもあるべし一ある見合せて内に頂弐
捨月になりて米ハ一向に。つかひ切りす。買ひ

高きに其人ハ買ひまで行も見へぬ時節なれバ
一家縁類の方へも無心がてらにも行さふらへ
こゝろ入ありしが。漸く粥にすゝりたらバ明る一日
飯米ハあるべし先明後日ハ是非とも一ケ當
まる積りにして。居たる所に幸ひ相場するより。米
直段弐分を引き下げたれバ。賣人も出来
て先き難儀を遁れて漸に夫れより上で
家内一同に餓死をまぬがれ。胸をひやしたる
事なり。此後ハ右の難儀より事を知ね

地の事なり。小土藏せずして迷惑なしといへども毎年
つゞかぬ米四五俵づゝ藏へ入置飢人用心におち
居るなり。ちそれすとも其元心得の為米嗜しやなり
常に用心米は。おくものなりと。おもたまへつし。
饑饉の年は表を張て居ずし餓死をせぬやうを
ちまぬものなりと。いはれし。其年は東國北國は
作方別条なく出来難儀もなかりし。
其後寛延元巳の年又宝暦五亥の年東國
北國米甚不作のとしありて夥しく餓死あり

其年は京都近国西國筋は大体豊年のこと
なりとぞ。是はいまだ一方づゝの凶年なり。
願はぬ事なれども此後とも東國西國共に
凶年ならば。いかばかりか難儀なるべし。
いやなる事なれども天変なれば是は決してなき
事とも定めがたし。然れば古老の遺戒を
まもり分限相応小饑饉の用意物は。富人
持つべき事なり。殊に我少年の時分に。京都の
町屋少くも大勢蔵ある人は凶年計難し

とて折ふしハ。年中の飯米を冬買置きして。
持ちたる人ありしなり。今ハさやうの事もなく。しばしば
夏ごしになりて虫ばみし米を食ハねバならぬ
とて。それを嫌ひ。たとひ悪き心ありても
年中の米を持人なし。是も即ち奢りに耽り
栄耀に長じて難儀を忘れしるものならんか。
扨宅ハ持つべきものハ芋の葉にて作りたる極上
よろしきよし。いろいろの干菜のたぐひ。かて飯
漬物類ハ。年々に。たくハへ持つ事。一くまハ。

いひ尽しがたし。此外心労能者なりとしるべし
て。銭銀の用意に。なすべきものハ。兼て心がけ
て宅ハ持ちおくべしと。おろそかなら
○老人曰。世間の若輩なる人。いへる事あり。
人若きとれ二度なし。たのしむべしと。かく
いふハ世の無常を。知らぬゆへなり。只
若きものを迷ふになる事ありとしらず。
無常の一方を忘れて。老少不定なるゆへ。
年老いて八十九十になりても死せざるもの

又壮盛なるうちハいかなる事も。さハらぬゆへなり。然ども
若き時二度なしとて。過分なる身のたのしみに
耽り。天命に定まれる果報を過越し。冥加を
尽さし。おもひのほか長生して貧苦の身となら
なんハ。甚不覚の至りなるべし。人若き時ハ。血気
さかんなるゆへ。食物もあらき物を食しても
歯もよく。口中もさハやかにして旨く。衣類も
重きものを着ても身に堪やすく。可笑なる
事も。おもしろく覚へぬ事なし。年老くまてハ

おかしき事もおかしからず。軽きものも身に重く
あるひハ。歯落口乾きて。余の物も味をうしなひ。
旨きを食へども旨からぬハ。老人の身なり。然しバ
人若き時ハ。とにもかくにも慎しむべし。唯
老後の身に堪ざる事を。おもひやるべきなり。
然らバ。おのづから若きより身をつゝしむ。あらば
心がけもまさりしバ。年老て。神仏の
冥加も尽ずして。生涯安楽なる身なるべし
かくいへり

○老人曰。近頃京都の川西に。有がたしの
吉兵衛と異名を呼ぶ人あり。其故を尋ぬに
此男吉凶禍福ともに。いかなる事にあひても。唯
有がたしとばかりいふ。いひて少しも世をも人をも
うらみずと。万に不足の色なし。されバかく異名
をつけたりとぞ。此男或時戸口を出さまに頭
頂を強く打しに。其を有がたしといひてゐぬ
折ふし傍にありける人問ふて有がたき訳を問ふに
こそよし頭をあてゝこの打て付が有がたけれとて

いひたれど吉兵衛こたへて。されバこそ我が頭を打しけ
るこそ。せんかたなし。然るに是ですみたるをふかく
事済しハ扨く有がたしとぞ。いひける。
すべて世の中の人萬に此男のごとく心を持ならバ
又の不足があるべきに。此男ハ志して道を学び
たる学しもならねど。自然に天命を安ずる
氣象あり。誰しも。かくありたきものなり。蟲も
似たるためしあり。蟻ハ巣に。働して王様と
いふハ何ごとを見んとくふを増てこそ。いひけるの

誠しと苦にあひてハ地獄の苦しミハ。歯しても
いひて世を。いとひ世の楽ミを好んでハ。極楽の
たのしみハ。ましてと。いひて浄土を。ねがひゐる
とぞ。又沙石集にハ。前世坊といふ僧ありけり此僧
苦にあひても前世の事と。いひて。うれへず。楽にあ
ひても前世の事と。いひて。よろこばざりしとや。
後生をとも此二人ハ仏門の沙汰なり。此吉凶ハ
何ことも俗人の沙汰にして現世を安心して悦び
暮せる人ハ。ひとしハ稀に。めづらしく。おほへ侍るとぞ

○老人曰。我若かりし時。遠都に在しける老翁
万事満足して楽ミ暮しけるあり。この翁
神社仏閣いづれにも詣でても。唯天下泰平
国土安穏とのミ唱へて。おのれの事とハいはず
余人あざけり笑ひて彼翁ハ何ぞ家内安全
とハいのらぬぞ。己の事を願ふものハなきと
抑しかども亦まことの心を知るものなし。我
或時彼翁に逢ひ。翁ハ何とて平生至極の
しく願しめすやと尋ねしに翁こたへて

されバとよ世に何も思ふ事なし。たゞこしも
世務に心づかひなく着たけれバ着。食たけ
れバ食。ねむたけれバ寐る。雨露にハぬれまじ。身
もこゝろも安楽に暮させゆくなりといふ。我ますく
何とて。そなたハ家内安全を祈らずして
いつまでも長命して。天下泰平を祈るハ
いかにといふ。翁答て。其方ハ若年なれバ。むかし此
事をしらざれバ不審もむべなり。其故を。かたら
て。きかせてべし。世にかなしく。これ程縁しきこと

いふハ乱世なり。我幼稚の時。手をひかれし。あるひハ
抱かれて夜々東山の中へ逃さる時も其恐ろし
かりし事どもを身にしみて。能おぼえゐれバ。今の時なる
の人ハ老若男女おしなべて。神仏にかのるを
祈る事のなし。皆天下泰平を。ばかり祈りし
なり。それより我も子供の時より父母ごの。いひ
きかせて。かくいふなり。亦も今其願ひを得て
泰平の有がたさを。わきまへバ更に他念なきさ
ゆへ。たのしく暮してなり。それさへも此のちハ

家の事をいはゞ。かく歳平を祈るべし
とぞ申しける。誠に誰も此翁のごとく歳平
乃御恩の有がたき事を。おもひて今日を送れ。
大安楽を有がたく悦び暮し冥加をおもひしる
べし。山谷曰。寡欲者ハ不伐之家也。知足者
極楽之国也とこそや。今日安穏を。楽まバ。何
ぞ他の所に求むべき。他の求めハ皆これ栄耀に
なるまで奢とハ病し来るべし。後悔草よりも
飢寒きのうれへ雨露にぬれまで。病ひのもとれ。

医を頼く。これを頼りとするものあひしを
おもひ合すべし。今の人ハ。此四苦是なり。身を
働くことなく。ふけをれぞ。渡世に手ハ治らぞ。衣食
住ハたりぬべし。医師ハ大かた町ごとにありて
病の患へを救へり。去なれど。これ何乃不足ぞの
ある。強く此事を。祈ひ求めば終にハ神仏の
冥加にも悪果あるべし。おそれつゝしむべき事
なりと。語りまし

家法訓下　終

宿老の物語事傳ふるまゝを書
ありも此ハ全く貨殖の為にあらず
先祖の家業を守るべき渡世に
便りとなさん為なり茲に
天のたまふ心りまて俗ねんころ

得る所にあらず又先祖の家業を失ひ渡世乏しかれど己が勤めざる所にして天の命にあらバ貨悖て入るものハ亦悖て出るとあるを道にたがふて貨財集むるハ得ざるのみにあらず是菑を集むるなりかくのごとくなれハ近くして家を亡すべし遠く唯心を正しく志て先祖の業をつぎ生涯を終るのミ其

位に素して行ふとかゝの其
神ならひとのこゝまに教へを施しみ
随ひて徒事残に在る事
なきの樹

渚庵

○書鋪循古堂藏版目録

京麩屋町通三条上ル二丁目
近江屋治郎吉

四書集註 京極版	十冊	
鼇頭四書集註	十冊	
四書類函 河子鷹輯	四冊	
五經類函 河子鷹輯 未刻	八冊	
詩經示蒙句解 中村惕齋著	十八冊	
同古註國字解 未刻		
新註書經國字解 大江資衡著 未刻	十冊	
左傳白文	六冊	
職原鈔 速水房常校訂	二冊	
和歌職原鈔	八冊	
和歌職原捷徑 大江資衡補	二冊	
徒然古今抄	十二冊	
神祇服忌令	一冊	
改正服忌令	一冊	
弓法義人草 小笠原弓書	二冊	
射術枕書	二冊	
朝鮮馬經	四冊	

列子		四冊
同張湛注		四冊
同國字解		八冊
性理字義		二冊
同頭書		二冊
韻字孝經解		一冊
天地萬物造化論	魯齋王柏撰	一冊
文公家禮		八冊
大和家禮		八冊
和字彙		九冊
兵家古戰傳		五冊
平家物語	真字	十二冊
源平盛衰記	真字	廿五冊
日本咏物詩	伊藤先生輯	三冊
明咏物詩選	伊藤先生輯 近刻	三冊
江吏部集	大江匡衡詩 大江資衡輯 近刻	四冊
玄圃先生集	二編詩部 近刻	三冊
仲景全書		十二冊
千金方		廿二冊
唯識論述記		廿冊

續小字彙		一冊
續蒙求		八冊
袖珍韻鏡		一冊
書史會要	未刻	九冊
宋七君子墨蹟	石摺	一冊
朱子風雪帖	石摺	一冊
朱文公像賛	石摺	一冊
朱子孝弟八字	石摺	一枚
朱子勸學文	石摺	一枚
子昂赤壁賦	石摺大字	二冊
唯識論同學鈔		六十冊
唯識略釋		四冊
四部錄鈔		一冊
夢中問答	夢窓國師法語	三冊
臍隱居	手嶋先生	一冊
我津衛	手嶋先生	三冊
子弟訓	手嶋先生	一冊
塵やま	手嶋先生近刻	三冊
前訓	手嶋先生 中嶋氏蔵版	一冊
知心辨疑	手嶋先生	一冊

米南宮水勢帖 石摺大字 一冊
雪山先生墨蹟 石摺 十二枚
筠圃先生年公帖 石摺 宮子常書 一冊
字學津梁 正字千文 石摺 方壺先生書 二冊
文覺上人國字文 石摺 方壺先生書 一冊
為萬ふ彩之記 [illegible] 一冊
阿弥陀裸物語 一休和尚問答ノ書之 二冊
童子教 附實語教 一冊
兒訓孝經繪抄 一冊

町人身体直し 手嶋先生 一冊
孝經童子訓 孝經ヲ解キ和ゲ頭書ニ前訓ヲノス 一冊
画本親孝行 近世孝子傳ヲアツメ解ス 二冊
教訓春日和 金蘭齋述 近刻 一冊
和刈 和田邑孝女萩代傳 一冊
頭書合類節用集 一[illegible]
新實語教 手嶋先生著 兒訓ノ書之 一冊
糠俵續篇 為盛物里 二冊
手嶋先生專用書目 施印

安永四年未五月
循古堂藏

弘所 京都書林
六角通御幸町西へ入町 小川多左衛門
二條通数屋町東へ入町 山本長兵衛
烏丸通松原下ル町 鈴木新平
新町高辻上ル岩戸山町 海老屋弥兵衛

[illegible]